

86-93

文學士芳賀矢一先生著

國文學史十講全



東京

合資
會社 富山房發行

緒言

一、去年八月帝國教育會の夏期講習會に出席して、十四日から廿三日迄十日間日本文學史の概要を講釋した、その時の速記録に多少の修正を加へたのが、即この國文學史十講であります。

一、それ故、この講義の中に、唯今、昨今、近頃などの語があるのは、去年八月の事と御承知を願ひます。

一、その節は十日の日限が切迫して、明治の文學はやらずに仕舞つたが、出版するについて、舛裁を整へる爲め、現代文學の一章を書加へました。

一、この講義はもとより龐末なものです。世に出す考もありませんかつたが、聴講した人々から是非にと請はれますので、とうとう出版する事になりました。

一、聴講者の多くが教育者であつたので、講義の中で折々教育上の注意がましい事を言つたところがあります。

一、或る種類の書物、ある種類の文學については、参考書註釋書など大切なものだけを挙げました。それは初學の人には便利だらうと思つたからです。いゝ本でも得難いものなどはなるべく省きました。

一、卷末に索引を附けたのは、一ツには書名や人の名の讀方を

どを知らせるためであります。

一、現存の人名を擧げるのには、大抵君の字を附けました。雅號を用ひた時には呼乗にしました。

一、兎に角、矢張などの宛字はなるべく用ひぬ積で、速記者の書いて置たのを一々直しましたが、中にはつひ見落して、残つたのもあります。

一、わるい處は再版の節直しませう。

明治卅二年十二月一日

講述者しるす。

國文學史十講

目次

第一講	緒論……………	一—二五
第二講	上古文學の一……………	二六—四八
第三講	上古文學の二……………	四九—七二
第四講	中古文學の一……………	七三—一〇二
第五講	中古文學の二……………	一〇三—一三〇
第六講	近古文學の一……………	一三一—一六二
第七講	近古文學の二……………	一六三—一八六

第八講 近世文學の一……………一八七—二二三

第九講 近世文學の二……………二三四—二五〇

第十講 現代文學—結論……………二五一—二六七

索引

國文學史十講

文學士 芳賀矢一講述

第一講 緒論

私が此帝國教育會の講習に出ることは、此度が二度目であります。一昨年此處へ出て文法の話をして致しましたが、今年も又何かやつて呉れと云ふ御話で、日本文學史を僅の間やつて見ようかと云ふことになりました。た御存知の通り、日本文學史と云へば、中々廣い題目で、一週間や十日位で講じると云ふことは六ヶ敷仕事であります。それを僅に二十時間ですつと仕事と云ふことは、一昨年講習に文法を二十時間でやつたよりも、一層六ヶ敷ことであらうと思ひます。そこでやり方も、どう云ふ風にやつたら宜からう。或は一部分の歴史、例へば徳川時代のことだけれども委しくやつたら、却て御利益が多からうとも考へて見ましたが、

段々多數の人の御意見を聞いて見ると、矢張全躰に涉つた方を聽きたいと云ふ御希望が多いやうです。から、極めて不完全ながら、我國文學歴史の全躰に涉つて、上古から近代に至る迄の御話をすると云ふことに取極めました。そこで第一に御承知を願つて置かなければならぬのは、極めて簡単に、綱領ばかりを申上げることです。ごいいますから、一向珍しい事も、新しいこともないといふ事であり、言ひたいことがあつても、時間の上からいへられないやうなこともあらうと思ひます。から、其邊は豫め御推測を願ひおきます。

日本文學史と云ふことは、近頃段々人がいふやうになり、著述も追々現はれて來ました。明治十七八年の頃、史學協會の雜誌に、栗田、木村などの先生達が文學史を書かれたのを見ましたが、纏まつた書物となつて、現れたのは、三上、參次、高津、鐵三郎、兩君の日本文學史が第一です。それから又同じ人が少しくそれを簡略にして日本文學小史と云ふものを書かれ、小中村、義象、増田、于、信、兩君が日本文學史とか云ふものを書かれ、其後

に大和田、建樹君が和文學史といふものを書かれました。其外には、鈴木、弘、恭君の日本文學史略と云ふものがあり、新保、磐次君の中學國文學史、今、泉、定、介君の日本文學小史と云ふものも出て居るさうであります。其他文學史と云ふやうな名が付かぬでも、文學史の一部分の研究はずつと昔からあり、昔からの歌學の書物や、文章を論じた書物は、皆文學史の一部分とみてよろしいのです。伴、蒿、蹊の國つ文世々の跡は、簡單なもので、すが、文躰を論じて、上古より近世にわたつて居ります。柳、原、芳、野氏の文藝類纂などは、立派な文學史、稍や、廣い意味の文學史であります。併し今日の處、文學史の參考に供すべき著述は、まだ、澤山は見えませぬ。西洋では、文學史のその歴史の出來る程ですが、我國では、立派な纏まつた文學史の、出るまでには、今少し種々な研究が、積み重ねば、なりませぬ。近頃は、段々と、一部分の研究が進んで來るやうですが、これは、實に喜ばしいことです。三上、高津、兩君が、日本文學史を著はされた時分は、世の中が、また文學の研究に向つて、居りませぬ。なかつた。近頃は、日本文學大綱など云

ふものも追々出て、一人一人、一時代に就いての研究が次第に盛になり
ました。さう云ふ風に一部分の研究が委しく出来ぬ中は纏まつた日本
文學史は出来ぬのであります。又韻律學や美辭學などの研究は勿論日
本文學に最も大きな影響を與へた漢文學や佛教なども精密に研究せ
られねばなりません。其他一般の歴史殊に美術の歴史などが分らなけ
れば、本當の文學史は分りませぬから、唯今申上げる文學史の如きはも
とより上つ面の概要だけに過ぎませぬ。今後益々この學問を研究する人
が出来て此學問の發達する事は最も希望するところでありませぬ。私
も不肖ながら、一生涯この研究に従事したいと心掛けて居ります。英
人のアストンと云ふ人は、日本語を研究した人でありませぬが、此人が日
本文學史を書くこと云ふことが、西洋の雜誌の廣告に見えて居ります。外
國人までが日本の文學史を研究する有様です。我々日本人たるものが
之を打棄てし置くわけには参りませぬ。さて此文學史と云ふものに就
いて一寸申上げて置かねければならぬことは、文學史と云ふものには

文學の意識

色々範圍があることでありませぬ。それはどう云ふ譯かど云ふと文學と
云ふ字の意味の取り方によつて様々の違ひが出て来るのであります。
それ故先づ第一に文學とはどんなものかといふことを御話致さなけ
ればなりません。

文學といふ語は支那でも日本でも昔から色々な意味に用ひられて居
ります。これは西洋の「リテラチュール」といふ字も同様で、其用法が種々あ
ります。その用法の種々あることが文學の定義を與へるのに困難な原
因だ。ある西洋の學者はいひました。先刻申した近頃の文學史の中で
も、鈴木弘恭さんなどは文章を作る學問といふ意味に取られて居り、小
中村、増田兩君の文學史には我國の藝文の歴史、學問全體の意味になつ
て居ります。茲で私が謂ふ文學史は、さういふ意味ではないのです。多數
の諸君には、已に御理解になつて居らうと思ひますが、書いた書き物、即
ち製作物を申すのであります。畫師が畫を書いて、其畫が一の美術品で
あるが如く、文學といふものは、文人によつて作られた製作物でありませ

六
す、歌であるとか、文であるとか、作られた美術品を指して文學と云ふのであります。巨勢金岡や狩野探幽などの書いた畫と同じく、紀貫之の歌、紫式部の文などは、一種の美術品であります。さう云ふ様なものを取つて文學と云ふので、文學は學問全體と云ふ意味でもなく、文章を作る爲めの學問でもない、彫刻に作つた佛像、建築家の建てた殿堂などと同じく、美術眼から見ても立派な美術品といふべき歌文を云ふのです。吾々の先祖がその思想感情を國語の上に現はして置いたものが立派に美術品に出来て居る、それを國文學と名けるのであります。國文學の歴史はさう云ふ美文の歴史だと云ふ事を御承知下さい。文學史の立て方によりては強ち美文の側ばかりを取らず、すべての書物の中で實用を主とするもの丈けを省いて、理想を主としたものは悉皆文學として取扱ふといふやり方もあります。即ち詩的の書物ばかりでなく、あまり美文とはいへない學術上の書物等も文學史の中に入れる場合もあります。今茲には稍狭い意味で美文ばかりを取つて御話するのであります。

的國文學史の目

文學の歴史に面白い事は、其文學の中には、ちのづと其國民の氣風、思想感情と云ふものが現はれて居ることであり、國民の思想、道德、感情と云ふものが其國文學の上に反映されて居ることが大切なのであります。それを取つて吾々が歴史的に研究するのであります。我國民の思想感情を現し出して居るものを取つて、それを調べて見ることは、即ち我が國民の思想感情の變遷を見る所以であります。國民の心性生活を知る所以であります。普通の政治歴史に於て何年何月の何日に、どう云ふ戦争があつて、どう云ふ天子様が位に御即きなすつたと云ふ様な政治歴史は、唯外形を見る丈けであります。日本國民がどんな生活をして居つて、どんな境遇に居つたかと云ふ本當の内面を覗ふには、文學の歴史を知るのが一番宜いのであります。或時代の文學を見れば、其當時に自分の身軀を置いて見るも同じことで、當時の人の心にもぐり込んで其の時代に住んで居るやうな心持になるのであります。我國は太古から建國數千年の久しき、少しも外國の侵襲を受けたことがない。万世一

系の天子様を戴いて千古不易なる國語を話して居ります。漢學や佛學が遣入つて来て、漢語、佛語が混つたり、文法上の構造が多少變つたりするのは時勢の變遷で、自然のことであり、日本語はどこまでも日本語です。かやうに數千年來、代々相續いて、日本語を話して来て、其日本語で綴つた文學が今日吾々の手に残つて居るといふことは如何にも貴い幸福なことです。一國の文明は其國民が造出するものであれば、我國の思想感情の變遷を現した文學史の裏面には、世界に特殊なる我國民の歴史が認められる事であり、文學歴史の必要なることはもとより論を待たぬことと云ふべきです。

そればかりではありませぬ、文學といふ様な物は昔からの歴史を研めなければ後の發達が出来ぬものであります。どんな文豪があらはれて來ても、昔からの文學に一わたり通曉して、その上に何か新しい機軸を出し、新しい制作をなすものであります。昔しからの傳説を根據として立つものであります。昔し（イ・リ・エ・シ）の文學を襲ふばかりでは死んだ文學で

すがさりとて一切昔からの文體趣向を全く顧みないで、新作は出来るものでありませぬ。譬へて見れば、草や木などが滋養を地中から吸つて居つて花が咲き實が結んで、其根は地の中に隠れて居る様なものです。古來の傳説や何かを根據として新しい制作が出来ないので、それ故文學史では主として其邊の消息が明になる様に發達變遷の跡を示さなければならぬものです。新しい文學者がどういふ點に於て新機軸を出したといふことを示すのが必要なのです。今日の文學者が古文學を研究しない、古文學の歴史を知らぬといふとは、文學の發達しない、一つの原因に相違ありません。もとより文學者などは天才を待たねばなりません。ゆけれども其天才も昔からの歴史を知らんでは充分な伎倆を延ばすとは出来ませぬ。有名な畫かきなども一わたり昔からの流義を見極める力があつて新機軸を出すのが出来るのです。昔からの謠曲や戯曲の生立を知らぬ天才では立派な明治の戯曲が出来様とも思はれませぬ。諸君の如き教育に従事せられる御方に於ては、實際上から文章や歌

の時代を知るといふ必要も無論あることです。さてこの文學史のやり方に就いては色々あります。或は事實を主としてあることがあり或は評論を主としてやることがある。文辭を主と論ずるもあり思想を主として論ずることもあり著作物の種類に依つて立てい往くこともあり人物を土臺にすることもあります。この人物を土臺にするといふとは餘程必要なことであります。なぜかといふに其文學の中には自ら其作者の人物が現はれるものであつて人物の境遇變遷は著しく文學に影響を與へるものでありますからです。例へば愛憎な人が歌を作れば愛憎なものが出来れば快潤な人が作れば快潤なものが出来ると云ふわけであり、それ故作者の人物をば輕々しく見ることは出来ぬのであります。非常な文豪が出て来て非常な秀逸な詩を作りましたならば當時の人の思想に影響する勢力を持つて來ます。其時代を一變する勢力を持つて來ます。さすれば其人の經歷境遇はとりも直さず其社會を變化するものといはねばなりません。これは文學者の

人物の傳記

みならず、豪傑は必ず社會の產物として社會に影響せられて生れて來ますが、又其影響によりて時代を助かし社會を變化します。大文學者も時代の爲めに造られて時代の思想を文學の上に現しますが、又個人としての影響をも時代の上に與へます。それ故文學者といふものは、經歷境遇、即ち傳記と云ふものは、文學史の中に輕々しく見ることは出来ぬものであります。文學史家の本領としては、餘程大切に文學者の境遇生立を調べて見る必要があります。我國の文學史をかけた古い書物は、其點の注意が餘程足らぬ様に思ひます。併しながら、唯文學者の傳記を並べたばかりでは一つの文學者年表で、文學史の名はつけられませぬ。人名辭書と同じ事です。書物の名を並べたばかりならば、群書一覽です。書物や學者の名を並べるばかりで文學史の能事は畢りませぬ。其間に充分な關係を持たせることが必要な事であり、人物の傳記を話すのは何の爲めに話すか。人物が其時代に於てどう云ふ風に生立つて、どう云う風に時代の影響を受けたか。どう云ふ境遇に立つて、どう云

ふ思想を養つて後の時代にはどう云ふ影響を興へたかといふことを見る爲めでありませぬ。時代の一人物と人物の一時代とは相聯關しなればならぬ。此文學時代は斯う云ふ人物に依つて造られた。此文豪はかういふ時代に成立つたてがういふ新機軸を出したと云ふ關係を見て文學の變つて來た次第其文學の變遷する有様を説明しなければならぬのであります。併しながらこれは本當の文學史の目的とするところでありませぬ。自分等の研究は未だ淺薄なものでありますから到底十分なことを御話をするには出來まいといふことは呉々もお断り申しておきます。且又傳記をお話することは大分時間を取ります。一人の傳記を御話しても直ぐ一時間位は經ちますから、逆も出來ますまいと思ひます。それ故各時代の主要の人物を初めに御話をしてそれからあとには有名な著述などの出たものに就いてちよいと話をしておいて其著述に就いて調べるには斯う云ふ本を見たら宜からう。或は此作者の傳記を見るには斯う云ふ書物を見たら宜からうと云ふ注意をお話して置

國文學の特質

くと云ふ位に止めやうと思ひます。一種變なやり方のやうですが短時間の講習には却つてこの方が宜からうと信ずるのであります。此講義が若し幾分にも諸君の御利益になれば私の爲めに大きな仕合であります。

我國の文學は神代から始まつて、連綿として今日迄傳はつて居ります。其間には盛衰もあり、變遷もあります。今これをお話する前に國文學全體の性質に就いて一言しようと思ひます。凡そ文學には外形と内容とがあります。外にあらはれた形と、内に含まれた思想とがある。これは文學ばかりでなく、あらゆる美術には外形と内容とがともに美しくなければ美術品といはれませぬ。建築について言ひませうか。その建物の外觀が美しく、石や木の配合もよく整頓して、立派でなければならぬ。神社佛閣に往けば如何にも神聖に感ぜられ、宮城にゆけば自ら尊敬の念を生ずるといふやうな思想がなければなりません。畫にしても、運筆が立派に出來て居ると共に、内容に奇抜なる所もなければなりません。文學

もそれと同じことで、文學の外形は即ち國語であります。國語を土臺にして出來て居る文章なり、歌なり、第一には其國語の綴り方が立派に出來て居らなければなりません。又其思想も高尚で立派でなければならぬ。文學の外形内容といふことはこの後も度々遣ひますから御記憶を願ひます。そこで我國文學の性質は、どうかと云ふに國文學は優美である。やさしい點に長じて居ると云ひます。これは恐くは外形の性質の爲めに多少の影響を受けて居るのではないかと思ひます。我國の言辭は御存知の通り、天仁遠波の多い國柄であります。一昨年講習會に御出になつた御方は、多分御記憶でせう。我國の國語は一種の漆着語であると云ふことを御話しました。天仁遠波を含んだ、漆付けの言葉だと云ふことを御話しました。即ち支那語のやうに、語々悉く意味があるのでなくして、天仁遠波の多い、助辭の多い國であつて、一つ一つの單語を考へて見ても、母音の多い國柄であるといふことを御話しました。此母音の多い單語が澤山の天仁遠波に結付けられて居ります。母音の多いといふ

とは言葉を柔かくするとは慥です。即ち言葉を奇麗にし、唇舌を滑かにしますが、それと同時に強いと云ふ點は失はれて來ます。佛蘭西の言葉は、母音が多く、宛轉として鶯の鳴くやうに聞え、獨乙語などのごつ／＼として、子音の多い語に較べると、餘程優美であります。佛蘭西語が世界の官廷の間に用ひられるのは、其言葉が如何にも優美であることが、一つの原因に相違ありません。我國語の母音の多いことは、佛蘭西、伊太利語の比でない。非常に母音が澤山あります。それ故日本の文學を讀んで見ると、誠に柔かい。従つて優美の感を起しますけれども、強健剛壯な點は飽き足らない様な氣持がする。之が即ち外形の上から及ぼした一つの性質ではないか。且又天仁遠波が多くて、同じ天仁遠波が度々現れて來る。この天仁遠波といふものは元來意味のない言葉で、或る言葉に附屬して始めて意味を生ずるものであります。それが幾つも同じ順序に現れて來るのは、文章の形を一定し、變化を少なくする結果を生じます。變化が少ないと云ふことは、極めて思むべきことで、變化が少ないれば文

章が面白くなくなる。我國の文章は形容詞動詞がいつも最後に現はれて來ますから文章の終止は大抵「なりけりたりけるなり」の如き動詞の聯語で終ります。これも文章の力を弱くする一つの原因ではあるまいか。漢語のやうに語々悉く意味を有して居れば其文章は極めて力が強くなる。我國の文章は悠々として追らぬ有様はあるが、單刀直入と云ふ所が缺けて居る。國文學の纖弱な風に傾き易いのは、儘に國語の性質に一原因があること信するのであります。それで我國文學は女子の手に早く發達した。平安朝には女の書いた文學が澤山現れて來た。是等は其時代の影響ではあります。が國語の性質が最もよく女子の文學に適したのではないか。要するに國語の上から見て我國の文學の一方に於て優美に長ずると同時に一方に於ては纖弱になり従つて單調に流れると云ふことは、地形の上からの影響ではないかと云ふ考であります。もし之に澤山の原因があればこれは必ず一の原因であらうと思ひます。第二には内容の上即ち思想の上からはどうかといふに雄大な風が少

ないといふとは通じての性質と思ひます。細かくて美しいと云ふとはあるが雄大の思想は概して乏しいのであります。我國の天地山川はまことに秀麗であつて其間に出た我が祖先吾々國民は如何にも美しい天地の間に生存して居ります。ヒマラヤ山のやうな高山が聳えて居るのでもなく恒河のやうな際限もない海のやうな河が流れて居ることもない。小さな山、小さな河が錯綜して如何にも畫のやうな景色である。氣候も極暑と云ふこともなく、極寒と云ふこともなく、大抵は温和で、美しい花が四時絶えず咲いて居る。我國の天地は平和な天地で、激變のない天地である。非常なことのない國であります。従つて國民の思想は烈しい過激なことはなく、深酷とか峻嚴とかいふとは少ないものと見える。それ故其思想界には雄大深遠な考が動きませぬ。印度の宗教説などには極めて大きな思想がある。山河を見ても恐ろしく、氣候も酷烈、何を見ても自然の力の高大無邊なるを悟る。我國の人は自然の高大無邊なることを悟ることは少ない。山にしても河にしても吾々の友達だと云

ふ考が起る。従つて同一の佛教でも、高大無邊の説を説いた佛教が日本に遣入つて來ては、平凡な實際的の佛教になつて仕舞ふやうな傾きがある。厭世といふやうな思想も、印度に於ける至極の厭世主義が、日本に來ると、餘程温和になる。かやうな揶揄で、我國には深遠廣大なる思想は少ない。我國の文學には、深遠な哲理思想を現した文學などは、一般に少ないといはねばなりません。

雄大なる規模に乏しいことは、我國文の特色であるのみならず、あらゆる美術に於てもさう云ふ傾きが見えて居る。外界の天地山川が奇麗な小さい景色であるのみか、咲く花にも女郎花やら萩の花やら細かくつて小さい美しい花が多いやうです。畫を畫いても極彩色の奇麗な畫を書き彫刻でも巨大な像などを作ることも、より小さい像を細かく奇麗に作るのが寧ろ得意です。即織巧なことが特色であります。日光のやうに美しい奇麗な建築をすることは上手だが、埃及のピラミッドのやうな大仕掛は氣に向きませぬ。あらゆる美術に向つてさう云ふ傾きが見

えて居るので、是が國民の性質であらうと思ひます。それで、我文學にも雄大高壯と云ふことは少なく、纖麗と云ふことが大變勝れて居るやうに見えるのであります。

國文學大體の性質に就いては、まづそんな事よりいはれませぬ。ついで時代の分別に遣入ります。私は便宜の爲め、次の様にわけて御話致します。

- 一、上古文學 (太古から平安奠都まで)
- 二、中古文學 (平安奠都から鎌倉幕府の創立まで)
- 三、近古文學 (鎌倉幕府の創立から江戸幕府の創立まで)
- 四、近世文學 (江戸幕府から明治維新まで)
- 五、現代文學 (明治の時代)

この各時代に就いて簡單にも話をしようと思ふ。

第一の太古時代は、神代から始まつて、奈良朝の末迄と定めましたから、此間は千四百年ばかりの長い間です。其間には三韓から漢學も傳はり

佛法も参りました。又其末になつては、直接に支那と交通する様になりましたから、此上古時代といふ中にも、開化の程度は餘程の差別がある譯です。併しこの長い間、我國字はまだ發明せられませんでした。従つて文獻の今日に徴すべきものは甚だ少いのです。古い處は口傳に傳へて來た歌や、祝詞や歴史を奈良朝になつて書き留めたものかあるばかり、奈良朝になつては漢文も自由に作り、漢字を遣つて國語を寫すとも一層盛になりましたから、色々の歴史や風土記や、中にも万葉集といふ様な結構な者も残つて居ります。奈良朝では支那の文物の影響も盛んに現はれて來まして、太古の簡單な有様とは餘程の相違になりました。併し押並べて申しますと、この時代の文學はまた純粹な日本風の處が多いのであります。幾分かは支那の思想も遣入り、佛法の思想も認められます。か大轉に於ては、神代以來の思想を純粹な、大和詞で書現したものであります。國字のない時代として之を上古文學の時代と立てました。第二の中古文學の初め頃には、假名文字が發明されました。男は漢文學

をやり漢文を作つたのに、上流の女は假名を以て柔き和文を書きました。歌集も物語も澤山あらはれて來まして、この中古文學の時期は、時代の短い割合には、中々澤山な産物がありました。こゝに至つては支那文學中佛教の影響は最も著く認められます。驕奢風流で、閑雅優美な時代であり、ますから文學も亦纖麗麗美を極めて居ります。併し丁度この時代の貴公子の様に弱々しい女らしい處があります。何にせよ、始めて國語で何でもかても綴れる様になり、日記も出來れば、歴史も出來るといふ風になりました。のは此時代です。そうして其詞の中には、多少の漢語や佛語もありますが、先づは漢文などから離れて別に發達をしたもので、この時代の國文は後世の模範文學になつて居ります。後世の國文學の源流は皆こゝから湧き出て居るのであります。

中古時代の花やかな時代か濟みますと、今度は幽鬱な近古時代になります。質素儉約を以て成立つた鎌倉幕府の世となりましては、風流閑雅な雲の上人は最早一昔しの夢です。佛法の厭世主義か一般に世の中を

仕配しました。同じ佛法でも花やかな天台の儀式、盛大な法華經の論義などは見られませぬ。物寂しい禪宗の座禪からやゝ滑稽じみた空也念佛の様に、世の中がすべて物寂しく隱遁的になりました。武人がはびこつて學問が全躰に衰へましたから、學者もどんどない。どこへいつて見ても頭の丸い人ばかり。文學は皆隱遁者の手から出る様になりました。文學はやはり其性質を受けて、諸行無常の空氣に包まれて居ります。近古と分けました中、鎌倉の時代には中古の物語が變遷して戰記物語となつて出ました。水鏡や神皇正統紀などの歴史も出ました。かいつれも佛法すくめです。足利になつてから出た謡曲も、佛法の教義を含んで居るものです。歌は公卿様の家に残つて居りましたが、勢もなく、力もなく、唯た昔の家格を守つて居るといふ様。丁度其公卿様の御身分と同じ様なものでした。鎌倉足利を通して六百五十年の間、思想の方では佛法の精神が世の中を仕配したとは、今申す通り、文藝をいひますれば、漢文のくづれが國文の中へ混和して、男文と女文との混淆が始まりました。そ

の中に徒然草や、正統紀などは混和がやゝ調和して居る様ですが、大體のものは漢語の語法の爲めに國文をくづした様な處も澤山あります。足利の世などは戦争の多い混亂した時代です。文學も其時代の有様に似て居ります。

さり乍らこの鎌倉足利兩時代から、つゞいて織豊時代にうつり始めて徳川時代の賑やかな文學時代となるのであります。徳川時代になつて急に種々の學問が盛になり、色々な文學も起りますが、これは皆近古時代に植ゑて置いた種から花が咲いたのです。徳川十五代は殊に學問の盛んな時代で色々な文學が産出せられた時代であります。これ迄は文學の種類も、中古では物語、鎌倉では戰記物語といふ風に限られて居り、作者は上流社會の婦人とか、山野の隱遁者とか、自ら限られて居りました。が今度はどんな種類でも持つてこい俳句も、こざれ小説も、こざれ戯曲も、こざれといふ鹽梅に種々の方面が發達して、作者は上王公貴人より下は八百屋魚屋等まで、文學に携はるることになりました。誠に盛んな

二四
状況です。いはゆる平民文學も起つたのです。印刷の術もこの時代の初から盛に行はれました。西洋人なれは明治が卅年で一足飛の開化をし
たと驚いて居ますが、決してさうでない。長い間の歴史、殊にこの徳川時
代などの學問の發達を知らぬからです。この徳川時代は始終儒教を以
て推通したから、この時代の文學の精神は儒教にありといつて宜しう
ございませう。戯曲、小説すべての物皆儒教で固めてあります。淫猥な社會
の反映として、随分猥褻な輕文學も澤山出來ましたか、それ等も表向き
は教訓を言ひ立て、居ります。近古時代の佛法づくめなものと相對照し
てして見れば面白い事です。この時代には漢學も盛んで漢文學の影響
も夥しい事です。西洋の思想も少しづつは滲入つて來ました。惜しい事
には上下の階級は嚴重に相侵さぬ通り文學も上流には上流の文學、下
流には下流の文學があつて自ら其嗜好を異にした様な有様でした。
明治の維新ついでに廢藩置縣すべての階級を打崩して一つにしまし
た。貴族平民の階級は法律上あつても社會の上にはないも同然てず、三

百諸侯の相反目したのかやんで、日本國民といふ一大國民の團結か出
來て居るので、即現代の文學は國民文學の出來る時代であり、維
新の後からは西洋學問も益盛に滲入つて來、文化か日に進んで來ると
は實に凄しい勢で、うか／＼すると時代後れの人になります。活版印刷
の術も盛になつて、新聞雜誌の發行、書籍の刊行、智識を進める手段は何
もかも備はつて來ました。文學も西法文學の影響を受けて、外國文學の
翻譯も行はれ、又西洋の文學を味つた人か歌や小説や戯曲などの改良
しようといふ企も度々聞きました。之から我國民文學が益、高遠な思想
を入れて、規模も大きくなり、國運の進歩に伴れて東西の精華を築めた
様な大文學の出ては期して望まれる事と信じます。
今日はさつとこれだけ、明日から各時代について御話いたします。

第二講 上古文學の一

今日は上古時代の文學について、概略の御話をしようと思ふ。上古の文學と云ふのは前回に申上げた通り、我國の文明が圓熟しない時代、外國の影響が餘り遘入つて居らぬ時代に發生した文學であります。此時代には文學を書きあらはすべき文字、日本の文字もまだ出來て居らぬ時代であります。けれども、此時代の文學は外國の影響の少い時代であるから、却つて國文學の源流を示すものとして面白いところがあります。我國文學の最初の生立はどう云ふ有様であつたか、純粹の日本文學はどう云ふ方向を以て始まつたか、と云ふことは、此時代の文學で分ります。三つ子の魂百までといつて、人の性質が小供の時現れるやうに、我國の文學の性質は此上代の文學の中に能く現れて居るやうに思はれます。

上代の文學は二つに分れる。万葉集以前の時代、万葉集の時代とこの二

つに分れます。万葉集以前の時代と云ふのは日本の歴史が始つて以來、引いて大化改新（大化改新）あたり迄の時代を云ふのであります。それから万葉集は奈良朝に出來たものであります。舒明天皇あたり以後の歌が澤山あるので、それから以後を万葉集時代と稱して宜いのです。万葉集以前は三韓と交通した時代、万葉集時代は隋唐と交通して居つた時代である。さう云ふ風に二つの時代に分けて論じなければなりません。そこでこの二つを推しなべて云ふと、上古の文學は韻文時代である。散文はまだ發達しない時代であります。文學を寫すべき文學のない時代です。から、文章の發達と云ふものも、もとよりありません。歌の方は口々に傳唱せられて此時代のものが今まで残つて居ります。奈良朝の世になつては一般の學問が進んで、漢文などを作ることが盛になりましたが、國文の散文はまだ發達しませぬ。漢字の音訓を利用して、和漢混淆文の「假名遣い」もいふべきものは、已に現はれて居りますが、假名の發明はこの時代の末頃になつて始めて出來たのであります。

さて万葉集以前の文學にはどう云ふものがあるかと云ふに第一に歌
 であります。神代の世からして神様達の御歌があります。人間の世にな
 つても神武天皇以下歴代の天子様皇后様の御歌が澤山傳つて居る。即
 ち日本紀古事記の中にこの歌が傳つて居ります。其等を見ると、上代の
 極古い時代から我國民の中には歌の發達があつたことが分ります。建
 築とか美術とか着物を染めたり織つたりする、工業上の有様などは随分
 簡單質素であつたのであるが、それ等に較べて見ると、文學の方は稍進
 んだ有様ではないかと思はれる。勿論神代紀の中にある歌の中には、後
 世で作つたのが誤つて神様の御自作のやうに傳はつて居るものもあ
 りませうから、一概に神様の御歌だと斷言することは出来ませぬが、概
 して日本紀古事記の歌を以て、上代の歌として宜いと思ひます。其等の
 歌と云ふものは二百首近くもあります。之は奈良朝以前の歌、即ち万葉
 集以前の歌として誠に貴重べきものであります。古い處から云ひまし
 ても世界の文學の中で、それ程古いものは少いのであります。絶對的に

紀記の歌

其價值を論じたらば、もとより大層な價值のあるものとも思はれませ
 ぬが、後世文學の淵源するものとして、我文學の最も古い遺物として、研
 究する必要があるのであります。
 素盞鳥尊のお作りなされた出雲八重垣の歌が三十一文字の歌の濫觴
 だといふことは古くから言傳へて居りますが、これは恐らくは後世にな
 つて三十一文字に直したのだらうと橘守部はいひました。兎に角神代
 から歌のあつた事は儘であります。人の世になつて、神武天皇などは色
 々な軍歌を作つて、士卒を獎勵遊ばした様です。日本武尊、應神天皇、仁徳
 天皇、繼體天皇、雄略天皇など、歴代英明の君主、皇子、皇后方の御歌は引續
 いて澤山傳つて居ります。その歌の中には酒宴の歌、壽頌の歌、吊慰の歌、
 國見の歌などもありますが、多くは戀歌であります。中には童謡といつ
 て誰が作つたか分らぬのもあり、猿が作つた歌なども見えて居ります。
 此頃の世には歌かいひといつて、男女が打寄つて歌を唱和する風があ
 つたので、其時によみ合はされた歌が顯宗記、武烈紀などに見えて居り

ますのは、誠におもしろい事です。惜しい事には歌の傳つて居るのは、多くは身分の高い方で、庶民どもの歌は傳はらないことであります。併し非常な名歌ならば、傳はらぬ譯もありませぬから、先づ大躰は似たりよつたりのものでありましたらうと思はれます。

さてこれ等の歌の中に含まれて居る思想はどうかといふに、此時代の簡單な時代と相應して概して單純なものであります。幽玄巧妙といふ様な詩想をばたらかせたものは皆無ない様です。其歌詞も多くは平話に近いもので、景色を有の儘に叙べたものなどが多い様です。一寸一例を擧げていへば、勇士の事を稱へるにはあゝ強いあゝ勇しいといひ、美人を褒めるにはあゝやさしいあゝうるはしいと歎賞するばかりであります。軍隊の歌などもさあ戦はう軍に克つた嗚呼愉快だといふやうなものが多い様です。酒の歌にはこれはどこの酒だ、甘い、酔つた〜と云ふばかりです。男女の戀なども随分露骨にいひ過ぎて、猥褻がいつたのがあります。戀愛と云ふことも、高尚な精神上の美德を嘆賞したこ

となどは一向ない様です。たゞ眼前の景色、思つた儘の有様を歌ひ出した丈けで、巧もなんにもないのがこの時代の歌の姿であります。

さりながらこの様な簡單質素の歌にも、譬喩を用ゐることだけは盛に行れて居ります。この譬喩の中には餘程意外なのがあつて、中々面白いものがあります。併し其譬喩も手近な植物や動物などに譬喩を取つたもので、規模の小さい事は誠に残念な次第です。大擧して敵を攻めるのを譬へるに、蠟子ろうしといつて、小さな具のうねり〜廻つてある有様にたとへてあります。外寇が攻めて來たことを、雁の群が田に下りて來たことなどに譬へてあります。軍事などに關係したのも、そんな風です。その他は推して測られます。死といふ事の恐しさを歌つたり、幽冥の世界などを思念したものは一向見當りませぬ。歌の材料についてこゝに最も注意しなければならぬ事は、後世の題目になつて居る花や月の歌が少しも無い事です。春には櫻梅鶯などいふもの、秋に鹿、蟲、月などいふいはゆる花鳥風月の歌が、後世の歌集では大部分を占めて居りますが、この

時分の歌は、それが一向見えて居らぬのであります。櫻の歌は允恭帝の御歌がたつた一首、それも譬喩です。月の歌は繼體天皇の御歌に見えて居りますが、それも純粹に月を詠した歌ではありませぬ。其外には月花の歌が一首もありませぬ。歌の題目が後世に至つて一變したのであります。此變遷した事は、私の考では支那文學の影響かと思ひます。紀記の中の歌でも、時代の遅いものは支那の思想ではないかと思ふのが見えます。人の命のはかない事を水の流れたとへたり、夫婦中のよい事を鶯燕にたとへたりするのは、支那の考らしい。それは尙後に万葉集の歌を御話する時に、一言しませうと思ひます。

さてかやうな思想を含んだ歌がどんな形に收められたかといふに、上代紀記の時代では、まだ後世の歌の如く、五七五七といふ風に、きまつて居りませぬ。四字の句もあれば、六字の句もあり、十一字の句もあると云ふ具合で、句數も一定しませぬ。元來我國の歌の形式は、五七五七を交錯するのだといひますが、委しくいへばもう少し細く分析して見なければ

ばならぬと思ひます。五の句は二三七の句は四三と分けて見て、その交錯を研究して見るのが、至當と思ひます。私か五六年前、少々この事を調べた事がありました。が、短歌の下の句で、三四四三四三四といふのは多いが、四三四三や三四三四となるのは、甚た少ない事を發見しました。後世の小歌、盆踊の歌、都々逸など云ひますものは、七七七五と二十六文字ですが、これを今の通り分けて見ると、上の三句は三四四三四三四とかう云ふ風に分れまして、三四四三などとなる事は、決して無いのです。かう云ふ鹽梅に歴代の歌を調べましたならば、歌の時代の調なども餘程分る事だらうと思ひますが、随分面倒な仕事で、まだ其後續いてもやりませぬ。そこでこの上代の歌に六の句があつたり、八の句があつたりするものは、私の考では、三の句や四の句や二の句やなどが、まだ遊離して居る時代の有様だらうと思ふのです。五七の調の一定しない時代で、ぶらぶらと浮いて居る時代だらうと思ふのであります。句の數も、まだ一定しませぬが、全躰から見れば、五七の交錯といふ事だけは、餘程出來かい

つて居るやうに思ひます。その五七の交錯に一つのと二つのと二つ以上の上のどがおります。即ち

- (イ) 五七₁
- (ロ) 五七₁五七₂
- (ハ) 五七₁五七₂五七₃
- (ニ) 五七₁五七₂五七₃五七₄五七₅

といふ鹽梅にいつでも五七を二つ重ねて、任舞に七を一つ加へるといふ形が出来かゝつて居ります。この(イ)が後世でいふ片歌で、(ロ)は短歌、即ち卅一文字の歌です。(ハ)から上が即ち長歌であります。この外(イ)を二つ重ねた形も見えます。これか後世の旋頭歌です。又(イ)と(ロ)とを重ねたものや(ロ)と(ハ)を重ねたものや様々な形があります。要するに句法句數もまだ一定して居らぬのであります。中にも(ロ)が一番多いといふ事は、後世に卅一文字が流行すると云ふ事を豫言して居るのであります。百八十餘首の歌の中に、後世のいはゆる三十一文字は凡そ六十首ばかりもありません。

次に此時代の歌の裝飾の方法と云ふものはどんなものでありませう。修辭上の技術にはどんなものが應用されたかといふに、一言でいへば繰返しといふ方法が最も盛に用ひられて居ります。同じ響を繰返すこと、同じ語を繰返すこと、同じ句を繰返すことなどが、頻に用ひられて居るのであります。同じ響の繰返しはアリテレーションといふものであります。之は西洋の古歌にも古くからあります。例へば、ぬばたまの、かひのくろこま、くらきせばいのちしなましかひのくろこまと云ふ歌がある。この歌にカキクケの音が多いことは誰にも分りませう。日本武尊の「さわさし、さかむのをぬにもゆるひの」と云ふのはサ行の音が多い。ほなかにたちてどひしきみはもはタチツテトです。さう云ふ風に同じ音響の語を繰返して耳に面白く響かせる方法が行はれて居ります。われはわすれじうちてしやまんはワキウエチになつて居る。このはさやぎぬかせふかんとすなど例を挙げれば澤山ありますが、これはアリテラ

チヲンと稱へて西洋の歌などには澤山あります。日本の古歌にも豈に其痕跡が見えると云ふこと、丈けは御話して置きます。

同じ語を繰返すことも澤山行はれて居ります。わかたみに、きゐるかけひめ、たまならば、あかほるたまのあけみしらたまのたまといふ語はなぐはし、さくらのめで、わかめでは、はやくはめです。わかめづるころのめづの如きものその一例です。對句と云ふものは我國の歌に於ては、餘程大事な裝飾法であります。國民の性質として、對句を貴んだことは、神様の御名前を見ても分ります。伊弉諾尊、伊弉册尊、天之狹土神、國狹土神、石拆神、根拆神、金山毘古神、金山毘賣神と云ふ風に、御兄弟御夫婦は、對句の名前を持つて御出なさる。これは我國の初からの文學思想であつたと見えます。紀記の長歌には全く對句のないのがあるが、万葉集の時代などになつては、長歌には必ず對句が必要になつて、對句がなければ歌でない様になりました。これは西洋の文學にはあまり見えぬ様であります。ヘブリエーの古詩、支那の詩などには盛に用ひたものであります。

我國にも古くからあるのであります。

以上繰返しの外又枕詞を用ひて飾ります。これは少しも繰のない語を入れて、來て別の事迄も聯想させるのであつて、世界の文學に類のない我國文學の一つの特色であります。枕詞の中には色々種類があります。が最も面白いのはかけ詞にあるのであります。タメテ射南佐の山といへば、楯を並べて射ると云ふ、その射るの動詞を直に山の名のイナサノ山へかけた處が面白いです。一旦外の觀念を再現させて置いて、しばらくは其中に彷徨させて、さて突然と別の物にうつらせる處が面白いのであります。それから又この枕辭と同じ様なもので序歌といふものがあります。これは枕詞と同じ性質で、枕詞の二句以上に亘つた様なものをいふのであります。これもこの時代の歌の中に多少見えます。枕詞でないかけ詞も二つや三つは見えます。要するに後世の歌の裝飾法になつて居る様な修辭上の巧みは、大抵紀記の歌の中に其萌芽が見えて居るのであります。繰語といふもの、丈けは私が見たところだけでは

紀歌の註釋

ない様に思ひます、尙委しい事を申し上げれば際限がありませぬ故、この位でやめておきます。是等の歌をしらべるには、日本紀古事記を御覽になれば分りますが、眞淵の門人で林諸鳥と云ふ人の紀歌集と云ふものがあります。これは歌ばかり扱いたいものです。又註釋は日本紀古事記の註釋書にそれ載せてありますけれども、特別に歌文を註釋したものがある。それを御話して置きませう。

厚 顔 抄

釋 契冲

日本紀歌廼解

荒木田久老

稜威言別

橘 守部

祝詞

かう云ふものに依て、日本紀の歌を御調べになつたら分らうと思ひます。万葉集以前の歌に就いては、これ文にして置かうと思ひます。上代の歌と相並んで我文學の最も古いものは祝詞であります。之は神祇を祭る詞であります。一方に於ては、男女の情をうたふ短い歌がある。

の、一、方、に、於、て、は、神、様、を、お、祭、り、す、る、長、い、文、句、が、あ、る、い、づ、れ、も、文、字、が、な、い、時、代、で、す、か、ら、口、々、に、傳、唱、せ、ら、れ、た、も、の、で、あ、り、ま、す。こ、の、二、つ、が、我、國、民、の、上、古、文、學、で、あ、り、ま、す。我、國、民、は、敬、神、の、國、民、神、様、を、重、ん、じ、祭、祀、を、重、ん、ず、る、國、民、で、す、か、ら、一、番、早、い、文、學、と、し、て、祝、詞、の、現、れ、て、居、る、こ、と、は、誠、に、自、然、な、こ、と、で、あ、り、ま、す。外、の、事、は、ま、だ、發、達、し、な、い、時、に、神、様、を、御、祭、る、文、學、が、發、達、し、て、居、つ、た、こ、と、は、面、白、い、こ、と、い、は、ね、ば、な、り、ま、せ、ぬ。一、眸、ノ、リ、ト、と、云、ふ、も、の、は、神、様、を、御、祭、り、す、る、時、に、天、子、様、か、ら、神、様、に、仰、せ、ら、る、こ、と、も、あ、り、御、祭、り、を、す、る、神、官、が、神、様、に、申、上、る、言、葉、も、あ、り、ま、す。が、い、づ、れ、に、し、て、も、神、祇、に、對、す、る、言、葉、で、あ、る。そ、れ、を、國、語、で、ノ、リ、ト、コ、ト、と、い、ひ、容、し、て、ノ、リ、ト、と、い、ふ、の、で、す。古、事、記、の、中、に、天、の、ふ、と、の、り、と、を、唱、へ、た、と、云、ふ、と、が、あ、る、か、ら、古、く、よ、り、言、傳、へ、に、傳、は、つ、て、御、祭、り、を、す、る、役、人、即、ち、中、臣、齋、部、な、ど、い、ふ、家、柄、の、人、が、唱、へ、た、も、の、で、す。之、は、文、學、上、か、ら、見、れ、ば、歌、で、は、な、い、散、文、即、ち、普、通、の、文、章、の、一、番、早、い、も、の、だ、と、云、ふ、こ、と、で、す。が、私、な、ど、の、考、で、は、ど、う、し、て、も、矢、張、韻、文、の、部、類、に、屬、す、る、も、の、だ、

らうと思ふ。之を上代の歌に較べて見ると、其思想の大きい事は比較にはなりませぬ。歌は唯一人の男が、一人の女に對して情を述べるを云ふやうなことで、規模が極めて小さいが、ノリトと云ふものは天地開闢の有様から説いて來ることが多い。さうして殆んど國民全體の意思を神様に申上げるから、規模が餘程大きいのです。文學の性質が元來大きいので國民的のものであります。又天神地祇に申上げるものですから、言葉の現はし方も、莊重森嚴で、雄大なところがあります。上代の歌は概して短い。然るに、ノリトは、滔々數百言を連ねて居ります。文學上の價值がら見れば、歌よりは餘程進んだものと云はなければなりません。正月や、十二月に、今でも各神社で神主の唱へる大祓の詞などは、中々大きな思想があります。これは皆さん御存じでせう。

天つ神は天の磐戸をさしひらきて、天の八重雲をいつの千別にちわきて開し召さん。國つ神は高山の末低山の末にのぼりまして、高山のいほり低山のいほりをかきわけて開し召さん。

かう云ふ風に下から申上げる言葉を、天神は天岩戸を押開きて、天の八重雲押分けて開しめし、國つ神は彼方の山、此方の山から御出になつて雲霧を押分けて、吾々の言ふことを御聞きなさらうと云ふ想像です。前に御話した此頃の歌には、こんな大きなことは、決していつてない。又罪が消えてゆく有様をいつた所には、

科戸の風の天の八重雲を吹放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳網解放ち艦網解放ちて大海原に押放つ事の如く、彼方の繁木か下を燒鎌の敏鎌もてうち拂ふことの如く、

斯う云ふ風に罪がはらはれて無くなることを愉快に形容して居る。大風が起つて、八重雲の雲を一遍に吹拂ふやうに、又は纜と帆を解放つて大きな船を押出すやうに、木の下に茂つて居る草を、鋭い鎌を以て切拂ふやうに、といふやうな、大きな譬喩があります。言葉は極めて莊重を盡しますから、一つの事柄も重々しく言願してあります。たとへば神様の

御殿を造る有様がある。唯材木を取つて来て伐るのを、

今ちくやまの大峽小峽に立てる木を齋部の齋斧をもちて切り取りて、本末を山神にまつりて、中間をもちいてきて、

かう云ふ風に莊重に同じ言葉を繰返して云つて居ります。同語を繰返すことや、對句を用ふることも、歌と同じ様な裝飾法は行はれて居りますが、歌とは又違つた所もあります。祝詞に多く用ひられたものは、半對語ともいふべきもので、大峽小峽、大木小木、鱈の廣物鱈の狭物などいふ風に半分づゝの對語を用ひたことであり、對句にはやはり規模の大きいのはありますが、歌程多くは用ひませぬ。枕詞や譬喩などは、餘程少い様ですが、かけ詞は見當りませぬ。これは祝詞の性質上、莊嚴を要しますから、飾を思ひます。裝飾がなくしてどこかに神事な處、雄健な處があります。歌と性質上の根本的差別を考へれば、この事は分ります。一篇の中の文節の繰返しごとくに、同じ様な句を繰返して、其度毎に神主どもは唯々と返事をしたといふことなども、莊嚴をます方法といはねば

なりませぬ。祝詞は延喜式の祝詞の中に、廿餘篇殘つて居ります。其中には舊詞といふものもござつて居ります。この廿餘篇は中世になつてから出来たのもあり、又後世に潤削を加へたのもありませうが、先づ大體は古いものと見てよろしいのです。

大祝詞 出雲國造神壽詞

大殿祭 御門祭

などが其中でも面白いやうです。台記別記に載せた中、臣壽詞は後世のもので、参考の價値はありません。大祝詞には註釋の書物が澤山あるが、皆神主連の註釋で、嘘などが澤山あります。

祝詞考 加茂貞淵

と云ふのが學者の註釋です。祝詞考の前に、祝詞解を書かれたが、之は版にならんで、後に祝詞考が出来たのです。これにも誤は勿論あります。中にも祝詞製作の時代を極められた所などは、あまり感心もさせぬ。此後に本居宣長が其誤を正して、大祝詞後釋と云ふのを書きました。それ

祝詞、舊詞の註釋

四四
から出雲國造神壽詞後釋と云ふのも、同じく本居です。本居宣長の弟子に、藤井高尙と云ふ人があつて、出雲の方に後々釋と云ふを拵へた。先づそんなもの、それから大變大きな註釋には、

祝詞講義 鈴木重胤

と云ふもので、之は百餘卷あります。簡単に講義の説も、後釋の説も、後々釋の説も採つて宜いと思ふのは、

祝詞畧解 久保季茲

と云ふのが六冊許りありまして、手頃な本です。活版に印刷されて居ります。

上代の文學はさつとこんなものであります。上代には漢學が早く遣入つて、應神天皇の時稚郎子が御學びになり、其後履仲天皇の時には史官を置いて、歴史を詞べてから、多少出来る人も出来ましたが、阿直岐王仁の子孫などが支那人の子孫がいつでも文筆のことを司つて居つたことを見れば出来る人も居らなかつたかと思えます。上代の末になつて、

佛法が遣入つて後、佛法を讀むに就いて漢學を勉強するところが益、必要になつて來たらしい。聖德太子が憲法十七條を漢文で書かれて居るのを見れば、聖德太子の時代などには、あの位の立派な漢文が出来たのです。我國の國文學の方では、まだのりどだの、右に御話した歌など許りであつた時代に、漢文は早やあゝ云ふ風に立派に作られたのであります。聖德太子のお作りなされた佛教の註釋は、今日迄残つて居ります。其他又歴史に關した書物もお作りになつたといひます。其外彼方此方にばつばつ漢文に書いたものが、佛様の背中に彫刻してあつたり、古い石碑に書いてあつたりするのが遺つて居ります。上代の末時代に至つては、最早漢文に書くとは、熟して居つたものと見える。併しまだ國文をあらはす國字が出来ませなんだ。漢文を作ること、少數の人に限られたものでありますから、一般の人の逆も窺ふこと、出来なかつたものに違ひないのです。こんな風で、段々社會の有様が進んで來た中に、大化改新と云ふことが行はれました。そこで隋唐の制度を折衷して、政治上の有様

を一變せられました。我國の臣連伴造の政治が改まつて郡縣制になりました。かやうに社會の有様が、一變するにつれて、新しい制度も布かれて、丁度今日西洋流に制度を布かれたと同じく、唐の制度に依つて、新制度をしかれましたから、新しい學問をしなければならぬことになり、従つて漢學が益盛に起つて來ました。それで學問のみならず、總ての制度に於て新しい制度を入れましたから、建築に於ても、畫に於ても、其他あらゆる美術文藝は、大化改新以後は、一層の進歩を見ました。佛教が盛行はれたに就いては、思想界も従つて變化して來ました。すべてかういふ様な社會上の大變動が、文學の上には、大切な變化を與へたのであります。上代の末になつては、漢學の流行につれて、詩を作ることも始りました。近江朝廷と云ふ天智天皇の時分には、弘文天皇や川島皇子などの皇子だけが詩をお作りなされ、朝野の博士高僧なども、澤山作つたことは、懷風藻といふ詩集などを見ても分ります。さう云ふ風に、支那文學接して來たと云ふことが、確に我國の文學を、進歩させた一原因だらうと

思ひます。支那は、此頃は、唐の時代ですから、餘程文化の開けた時代であります。其時代の詩文章を見て、如何にも外國の文學の立派なものがあつたに違ひないのであります。いはゆる万葉集の歌は、餘程支那文學の影響を受けて居ることは間違ひないのであります。兎に角、孝德以後、奈良朝にかけては、一般社會の狀態と同じく、文學も亦變動を受くる時期に向つて居ります。

この文學變轉の時期にあつて、先達者として現はれ出た一人の歌よみがあります。これが歌聖といつて、名高い柿本人麿であります。この人は奈良朝よりも以前の人です。持統文武時代の人であります。奈良の都の遷らぬ前で、大伴家持など、奈良朝の歌人から見ると、先輩であります。奈良朝の歌人から見れば、先達であるから、殊に後世から賞ばれたのであらうと思ひます。人麿などは、思想の上に支那の影響とても見えませぬが、歌の形、題目などに於ては、明かに支那文學の影響を受けて居りま

す。是も注意せねばなりませぬ。柿本人麻呂と云ふ人は天子様の後裔であるので、孝昭天皇の御子様に天足彦國押人命と云ふ人がある。此御方の子孫だと云ふことです。父母共に分らない。身分は極めて卑い人であるのです。上代は天子様か、皇后様でなければ歌が傳らなかつたが、此時分には人麻呂などの様に、全く歌人を以て傳はりましたのを見ても、歌人と云ふ歌の技術家が責はれるやうになつたことが分ります。此人の生れたのは天智天皇の元年頃、紀元千三百二十二年頃であると云ふので、二十六七の頃から草壁皇子の舍人になつた。所が其後草壁皇太子が薨御になつて又高市皇子に御仕へ申した。間もなく其皇子も薨御になつた。其度毎に作つた歌が万葉集の中に見えて居ります。其後石見國の厨官になつて、四十八九で石見の國で死んだらしい。此人が大化以後の新弊歌を起して、奈良朝の先驅者となつた人です。聖德太子以來一般學問の進歩は遂に國歌の發達を促したのであります。

第三講 上古文學の二

昨日は上古文學のお話をして、紀記中の歌と祝詞に就いて申上げました。今日は万葉集時代の歌について概要の御話をいたします。万葉集に收めてある歌は、仁徳天皇時代の歌からあるが、さう古い歌は少ないから、先づ舒明天皇以後あたりの歌を集めたものと見て宜しい。其時代が即ち万葉集の歌の時代です。昨日も申しかけた通り、柿本人麿などが此万葉集時代を作り出した先達者であつたかともひます。柿本人麿の歌は形式に於ても從來の歌よりは餘程大きくなりました。是迄の上代の歌は形式も小さい。古事記日本紀に出て居る八千矛神の歌は、後世の作かといふ疑もあつて、紀記中には大きな長歌はありませぬ。万葉以前の歌は形式が小さいばかりでなく、對句なども充分に發達して居りませぬ。ところが祝詞の方には大きな長いものがあつて、滔々數百言を連ねて居り、對句の用ひ方なども歌よりも手際能く用ひられて居る。又

其思想の雄大なる點に於てはもとより和歌の及ぶところではありませぬ。人麿等は其祝詞に用ひられて居つた形式祝詞の含んで居つた思想を取も直さず歌の方へ嵌めたのであります。万葉集時代の歌の歌風が雄大になつたのは是から始まつたと思ひます。後世の艶麗纖巧を競ふ歌に比べて万葉集時代が雄大であると思ふのはさう云ふ所から出來たのだと思ふのです。其證據には第一祝詞を讀んで、それから人麿の歌を讀んで御覽なさい。其類似は著しい事でありませぬ。一々例を示す暇もありませんが、万葉集一卷に於ける吉野宮の歌、高市の皇子殯宮の歌など、又は近江荒都を過ぐる歌などいづれも神代の昔から説いて神代以來のことを歴史的に説いて來る處があります。これが即ち祝詞の性質で、祝詞はいつでも開闢以來の因縁から説いて來るから莊嚴になるのであります。太古に遡つて天孫降臨の所から説いて來るのが祝詞であります。人麿の歌も同じく天孫降臨から説いて來ます。これは全く祝詞から得て來た思想だらうと思ひます。人麿の眼から見れば、あらゆる天地

山川は天孫降臨の後に出來たのである。其天地山川は悉く我君の爲めに御用を足すと云ふ意味で、思想に大きいところがあります。花や月を見て樂むと云ふ文けでなくして、其歌はいつでも國家と關係を持つて、我國の天子様と云ふものを押立て、歴史的に説いて來るのであるから規模が全体に大きく國民的になつて居る。従つて其歌の形式も大きくならなければならぬのです。高市の宮の殯宮の歌の如きは百四十九句を並べて、万葉集第一の長篇であります。思想が豊富になり雄大になれば、歌の形式も同時に大きくならねばならぬのは當然の事です。万葉集以後に至つて、歌の形の大きくなつたのは人麿等が振起したのであらうと思ひます。上代の簡単な歌がこゝに至つて大に發達しました。人麿の歌は人間の愛情に關係して詠んだ歌が多い。殊に人の死を悲んだりするものが澤山あります。夫婦哀別の情を述べた歌などにはもとより天地開闢からは説きませぬが、其代り眼前に見えた玉藻などを借りて數十句もある序詞を列ねます。其仕方は皇子などの哀悼に天地の昔か

ら説くのと同一筆法です。詩想に應じて、詩形を變へるのです。唯自然の景色のみを詠むのは少ない様です。要するに昔から行はれてあつた祝詞、即ち國家の祭典の大儀式に用ひられる歌を、個人の哀悼憐愛に向つて當嵌めたので、これが爲に歌の形式、思想の雄大を來したのであると思ひます。併し柿本人麿は後世に於て歌の聖人と云はれて居る程、今日の詩眼から見れば、價値があるものでない。驚くべき天才を持つて居る程でもなし、想像が非常に深いことでない。唯万葉集の歌を作り出した人として此時代に卓越して居つたとは勿論の事です。

山部赤人の傳記も能くは分りませんが、伊豫の來目郡の小楯と云ふ人があつて山部と云ふ姓を賜つたと云ふことがあるから、いづれ其末裔でございませう。其歌は人麿程澤山には遺つて居ない。重に神龜頃に作つた歌です。柿本人麿と名を等しくして居つたことは、古く山柿と並べ稱へられたので分ります。奈良朝から見れば同じく先輩であります。この人の歌にも莊重謹嚴と云ふ處がある。何となく、神聖なやうな處が見

山部赤人

える。別段に言葉を飾らないで、純朴な言葉を用ひて、莊重に重々しく見える處がある。それが此人の長所です。詩料からいつても人麿とは反對で、赤人の山川を詠んだ歌が多い。天地山川に就いて有の儘に詠んだのが多い。名高い富士山の歌など、やはり神代にかけて述べてくる有様。どう見ても祝詞の莊嚴なる方面の骨髓を得たものであります。万葉集以前の歌には、そんな品韻は得られませぬ。先づ其等の歌人が万葉集の先輩中の優れた歌人であります。

祝詞の長所を歌に結付けた事は、已にいひました。支那文學の影響も、亦最も注意しなければならぬ事柄であります。上古の歌は折ふしの感情を吐露するのが主でありましたから、題を出して歌を作ると云ふやうな事はなかつたのであります。万葉集時代でも、古今集以後の程ではありませんが、最早題詠が澤山出來ました。万葉にある題詠は後世の人が題ばかりをつけたのだと北邊隨筆などにはいつてありますが、最早作つた歌の部類だらうと私は信じます。且又上代の歌は直に歌つたもの

でありましたが、万葉集時代では最早目に見る歌となつたといふ事は大事な事であり、上古は目から耳に遣入つたが、今度は筆から目に遣入る歌となつたのであります。上古は文字がなくつて、口々に傳唱せられたのでありましたが、此時代には最早漢字の音訓を利用して、文字の上に書きあらはしました。万葉集の漢字のあて方が餘程戯れ書を用ひて居ります。これは即ち目に訴へる一つの證據であります。かやうな事は全く支那の詩賦と同じ様に、歌を取扱つたのであります。前回にも人麿や赤人がまだ子供の時分に、懐風藻などに見えて居る通り、詩を作る事が大層盛に行はれた事を申し上げました。この事には充分御注意を願ひたい。懐風藻の中の詩には、吉野川に遊ぶなど云ふ様な題の詩が澤山あります。人麿の歌に吉野宮歌などいふ題のあるのは全くそれから來た事と信じます。上代には決してそんなことはありませぬ。龍瀧はいたるところ宴會の場合などに歌を召されたこと、即ち詩を献したのと同様に、歌を召された風が起つたことも、全く支那の詩賦に思寄つた

のであります。支那の詩賦の題目には、人の死を悲んだり、妻の死を嘆いた様な事が、文選などを見ると、澤山あります。人麿などの歌に妻の死を悲む様な題の歌があるのは、やはり其れを學んだのでありませう。即ち大跡に於て歌といふものゝ性質が、支那の詩賦から非常な影響を受けたことは、疑がないと信ずるのであります。それ故歌の材料についても、上代の歌に比べれば、大層な變化が認められます。上古文學の時に話申上げた通り、上代の歌には花を愛したり月を愛したりする歌は、一首も見えませぬ。後世は秋の月春の花と並べて名物になつて居りますが、万葉集時代にはまだ其事が少ない。併し上代の歌には全くない。日本の神代紀開闢説でも、天照大御神は日を代表して御出なさるが、月には月讀尊はあるが、極めて勢力のない神です。月光の輝いた所は、神代紀に見えない様です。星も一向名前が出ない。俗語に星の名前はありませぬ。宵の明星、三つ星位なもので、飛んで歩くのを夜道星と言ひます。其外には星の名前を知りませぬ。カルヂヤ人は遊牧

の民で、夜起きて居るから、天文学に明るかつたと云ふが、我國の人民は農業國で、晝の疲れに早寝をするので、天體のことには注意が少なかつたのでありませう。晝の間の天地山川に美しい日の輝くのは、歌に詠まれてあるが、夜の景色は少しも見えませぬ。月を弄ぶとは全く支那から來た考たらうと思ひます。雨を祈る歌や、七夕の歌や、天の川を見て作る歌などがあるのも、恐くは支那の方から來た思想でありませう。上代には、鶯や郭公の歌もありませぬが、万葉からは是も加つて來ます。昔も、今も、鳥の鳴くのを、花の咲くのに區別はないのですが、唯支那の詩に取る題目を歌に詠むやうになつたのであります。歌に詠む材料が、詩の爲めに一大變動を受けました。先刻申した懷風藻を御覽になれば、この事は思半に過ぎるといつても宜しからうと思ひます。懷風藻の中には、春といへば、鶯、柳、桃などの句があり、秋といへば、月、蛸の聲などを引合に出し、春は楽しいもの、秋は悲しいもの、相場が極つて居ります。これらの思想は全く支那の詩賦から導かれたものと、私は斷言するのであります。

す。佛教の方からの影響も同じ事で、世界の常なきを悲んだり、朝露の様な運命を歎いたりすることが、澤山あります。これらは皆佛教からの影響でありまして、上代歌人の知らぬ事でありませぬ。世の中を塵芥の様に見て、酒を天の美祿などといつて、磊落豪放を尊ぶのも、支那文物に接してからの事と思ひます。何にせよ、我國歌は固有の祝詞を融合したる外に、漢學、佛教の兩元素を入れて、著しい發達をなした事は、疑のない事でありませぬ。

万葉集

万葉集には長歌が二百六十二首、短歌が四千百七十三首、旋頭歌は六十一首あると申します。卷數にして廿卷、眞に万葉集の名に背きませぬ。これ皆千年以前の吾々の祖先が詠み出したものとあれば、中々尊むべき遺物ではありませぬか。

西洋諸國などが眞闇の時分、これ丈の文學があつたことは、流石に東洋の古國と吾々は非常に愉快に思ひます。其以前には僅かに日本紀

古事記あるのみなるに、茲には始めて二十卷の歌集で、五千首にも近き歌が残つて居るのは、誠に愉快なことであります。これは橘諸兄が勅を奉して選んだと云ふのが、普通の説で、眞淵翁もそれを取られ、其他にも色々の説がありますが、一番宜いのは釋契沖の説であらうと思ひます。契沖の説に據れば、万葉集は大伴家持卿の手に成つたもので、此人が小供の時から今昔の歌を見聞するに従つて寫して置いたのである、それは天平寶字三年と云ふ年迄、彼是順序立て、書いて置かれたのであるが、其後順序も立てず、有の儘に書いたものらしいと云ふのである。家持自身の歌も澤山混つて居る。即ち万葉集の十七以下二十までは、全く家持卿の歌集である。此契沖の説に就いて、最も強い證據は、家持卿の歌に限つて拙歌、拙き歌と書いたのが一つの證據、大伴旅人即ち家持の父の歌は、微官の時から官名を書いてあるのが第二の證據、その外また二つ程有力な證據があります。家持卿は桓武天皇延暦四年に薨せられた人で、奈良朝の末に榮えた人であり、即ち万葉

集は奈良朝の末に出来たものである、それをどう間違つたか、平城天皇の時出来たと云ふ説があります。その悪いと云ふことは、先輩も論しました。それ故万葉集は勅選集ではないのです。併し後世からは殆んど敕撰の如く見られました。後世の勅選集が大抵廿卷であるのも、全く万葉集の卷數廿卷に倣つたのであります。

世に歌よみで名が残る様になつたのも、此時代からです。上古の文學時代には別に歌人といふ人もないが、此時分には人麿、赤人などの人々は傳が分らんで、歌人で傳つて居る人です。集中の作者の數は、總て五百六十一人と申します。其中には上天皇皇子より、下は僧尼の世捨人に至る迄あります。女子も七十人ばかりあると申します。作者の分に又地方の歌も多く見えます。歌の一般に擴つて盛況を呈したことも分ります。併し其作者中の半數以上は、やはり都人、在朝の官人であり、百餘城の大宮人が歌人の大半を占めて居つたのであります。其等の人々の中では、山上憶良、笠金村、石川郎女、續いて大伴家持と云ふ人などが、此集

中の立派な歌人であり、憶良は天平五年に七十四で死にしましたが、其死去前五六年間の歌ばかり、即筑前守になつて九州へ行つてからの歌ばかり傳はつて居ります。この筑前守在任中旅人といふ家持の父さんと近附になり、それで歌か傳はつたのでせう。この人は漢學者で佛學にも深うございしました。遣唐少録で唐へ渡り後東宮の侍講になつた程の人です。大伴家持も漢學に通じ佛法を學びました。この時代の人はみな同様であります。先刻申した漢學、佛敎の影響などは此人の歌などに多く見えます。中にも憶良は人情を細かに詠むと云ふ風に向いて居つた人である。外の人とは着目が違つて、色々の人事を詠み出しました。貧窮問答の歌の中に、貧乏人の有様を寫して居る鹽梅、西洋で云ふと「エビ・イカル」即ち敘事詩人になるやうな傾のある人でした。人麿のやうな上品な所はないが、思想にも言辭にも變化があります。此人などが發達したら餘程面白かつたらうと思ひます。此人の後を繼いでやる人がなかつたのは國歌の爲めに惜しい事であり、一昧万葉集以後は一般に

歌が廢つて誰も彼も支那の詩文章を作る方のみに眼を向けて仕舞つたので、遂に國文學の自然の發達を成就しませんでした。之は返すくも惜むべきことであります。それは兎もあれ万葉集は我國歌の淵源です。後世の歌は万葉集の形式を脱することが出来ぬ。五七の調も万葉集に至つて始めて定まりました。長短歌、旋頭歌の區別もこの時から極りがついたので、後世の和歌は皆濫觴を万葉に發して居ります。万葉集の歌を研究した者は、澤山あつて一々擧げることが出来ませぬ。木村正辭先生の万葉集書目提要と云ふものがあつて、万葉集に関する總ての書物を網羅して居りますが、この書目以外にも多少あります。その中で重なる物を二つ三つ話して置かうと思ひます。この万葉集は、村上天皇の時分になつて、早や讀方が分らなくなつたので、其時分に研究して假名を付けたのがあります。それが古點、其後次點といふのもあります。鎌倉時代になつて仙覺と云ふ坊さんが讀んだのを新點と云ひました。この新點をつけた仙覺の註釋が今もあります。之が万葉集註

釋の中で一番古いものでせう。徳川時代になつて古學が復興してからは、色々宜い註釋も出ました。名高いのは、契沖の万葉集代匠記です。契沖は下河邊長流と云ふ人と、万葉集の研究に一生を委ねた人であり、ます。水戸の西山公の命を受けて、長流と自分の説を書き集めたのが、万葉集代匠記で、万葉集研究の一番價値のあるものであります。之が復古學者研究の第一である。其後

万葉集の註釋

万葉集童蒙抄

荷田東瀟

と云ふものが出来た。其又弟子の加茂真淵が、万葉考と云ふものを書いた。色々新しい研究もある。今のは本當の万葉集ではないといつて、卷の順序を正しました。万葉集を読むには必ず之を読んで置かなければなりません。

万葉集概の落葉

荒木田久老

万葉集燈

富士名御杖

と云ふものもあるが、それ程價値のあるものでない。其後

万葉集畧解

橋千蔭

と云ふものが出来た。之は簡畧で読み易い本にしてあるから、一番廣く行はれて居ります。初學には適當なものです。橋守部の万葉集檢抓といふものもあります。それから後に近頃の學者で

○万葉集古義

鹿持雅澄

之が万葉集の中で、一番の大著述です。之は百五十二卷の大著述であり、ゆる註釋を集め、大成しました。宮内省の御藏版で立派な本に出来ました。近頃活版でやることになつて、昨日か一昨日かの新聞に廣告がしてありました。あまり見識のない人と見えて、陳腐な説もある様です。か兎に角、あらゆる註釋を集めて居りますから、尊いものです。それから是非見て置なければならぬものと思ひますのは

○万葉集玉の小琴

本居宣長

で、之れは盡くの註釋ではないが、文字の違つた所などを直してあるから、是非見なければなりません。その外、木村正辭先生の万葉集美夫久志

といふものが一二冊出て居ります。其の他万葉集に關するものは無數に澤山あります。語學の方から見ても字引を拵へたり、歴史から見て其事柄を摘んで見たり色々あります。詳しいとは万葉集書目に載せてありますから、それを御覽なさい。万葉集は古い時代、我國に外の學問の無い時代、歴史と言つても古事記とか日本紀とか材料の少い時に、あの位澤山な歌があつて、其時分の人間の心に遣入つて研究する材料が澤山残つて居りますから、万葉集に向つて學者が目を傾けるのは普通のことであり、万葉集の字を研究して類聚したのは、

○万葉集用字格

釋 春 登

と云ふもので、中々面白い。之は夜店などにも幾らもありますから、序にお求めなさい。人物の傳は古義の中にある。

万葉集人物傳

万葉集作者履歷

を見れば宜しい。あの方々は多分契沖の弟子の海北若沖の作だらうといはれて居ります。万葉集の歌の面白いの丈け採萃したのが

万葉集佳調

長瀬 真幸

同じく拾遺が一冊あります。長歌短歌に拘らず、善いのを抜いてあります。本居大平の山常百首といふのは短歌ばかり抜いたものです。万葉集の歌は西洋人も少し翻譯して居ります。日本の大學の教授をして居つたチャンパレン氏が翻譯して居ります。それは Classical poetry of the Japanese. と云ふもの、中に載せてあります。

次に万葉集時代の文學としていはなければならぬのは、古事記の文章も、宣命の文章であります。すべてこの時代は支那の文明に眩惑せられて居つて、我國固有の事柄を忘れて仕舞ふ傾きがあつた。然るに文章を書くことは段々上手になつて、漢字を使つて文章を書ける人も追々に出来てきたから、歴史を書き、地理を書いて、古老の遺聞を傳へて置かうと云ふ考が出て來たものと思ひます。奈良の都が遷る時分には歴史地

古事記

理が段々出来ました。古事記は奈良朝の極く始めに出来ました。楠本人磨よりは遅いが大伴家持よりは早い。元明天皇の和銅四年に出来上つたのであります。こゝに初めて日本の歴史と云ふものが出来ました。古事記は人の口々に傳誦した事を直に筆記したことがありますから、太古の文學とも見られ、又我國の神代紀を歌つた詩とも見られます。端嚴莊重なる所、重々しい所、文章の雄健なる所は矢張祝詞杯と同じ所があります。素尊が高天原に行つて、天照大神に御逢ひなさる處、素尊の蛇を退治なさる處などは、如何にも雄大に壯麗な文章といはねばなりません。チャンパレン氏なども、紀元七〇〇年にこの様な文學があるといつて、讚めて居ります。古事記の註釋は本居宣長の古事記傳、これは古事記の註釋といふばかりでなく、實に近來國學の大著述であります。

古事記傳畧

吉岡 徳明

と云ふものがあつて大略のことはこれで分ります。其外には

古事記燈

富士谷 御杖

古事記標註

敷田 年治

と云ふものも、近頃出来ました。チャンパレン氏の英譯古事記は名高いものです。古事記が出来てから八年程たつて日本紀と云ふものが出来た。これは漢文で書いたものであつて、支那人杯に見せても差支がないと云ふ爲に漢文に書いたのでせう。兎に角漢文で歴史を書くこと云ふ所まで、此時代は進んで來ました。

風土記も漢文で書きましたが、惜しいことには大方はなくなつて今残つて居りませぬ。當時に出来たもので、殘缺もあるが、残つて居るのは、出雲、播磨、常陸、肥前、豊後である。浦島太郎の龜に乗つた話、天人が羽衣を取られた話なども風土記にあるのですか、これ等の話も、やはり純粹な日本思想ではない様です。漢佛思想の傳播頗る盛しといはねはなりません。出雲風土記は全部残つて居ります。

出雲風土記考

横山 永福

出雲風土記解

内山 眞龍

風土記

と云ふ者があります。貴重な著述は粟田先生の風土記逸文であります。次には宣命に就いて一言しませう。宣命は天子様の詔であります。詔を宣り聞かせること云ふので、性質は祝詞に近いものであります。祝詞は神様に天子の仰せを宣ることが多いので、詰り祝詞と同じものです。併しながら祝詞は神様に申すのが主であるが宣命は一般の人民又は朝廷の役人に仰せらるゝ言葉で今日申す勅語詔勅であります。之は上代にはなかつた或はあつたかも知らんが傳はつて居らぬのです。幸に萬葉集時代の文は今日残つて居る。それから以後のもありますが、段々漢文の風調を帯ひて居ります。仕舞にはすつかり漢文になつて仕舞ました。純粹の古文として、万葉集時代の勅語が残つて居るのは、文學上から尋むべきことであります。

之を前の祝詞に比べて見てどうかと云ふに一方は神様に申上げる。一方は生きた神様から頂戴する言葉で、莊嚴な點に於て、莊嚴な點に於て

宣命

は一致して居るのである。其文體に於ても祝詞に似て居ると云ふとは承知しなければならぬ。どう云ふ所が違ふかと云ふと、宣命の方は文章に近づいて來て居るのである。祝詞に較べて散文的になつて居るのであります。即ち對句などを用ふる事が餘程減つて居る。祝詞は諷誦を主として、祭毎に繰返したものでせうが宣命は、一事件毎に別であります。し、事柄が重大ですから、裝飾は益少くなつて居ります。

これは御即位の時、御讓位の時、皇后様を御立てになる時、立太子の時、大臣の任官、免官をすると云ふ場合に多く用ひられるので極めて莊嚴な儀式を以て行はれたと云ふことです。宣命を讀む時にあつては、大臣が宣命文を持つて進むと、三位以上の讀み手が讀み、皇太子以下、列座で聞かれたのです。書き方も祝詞と餘程似て居ります。祝詞も初めは國體や天孫降臨から説いて來るが、宣命も開國の昔から説いて、たとへば即位の宣命などでは、先づ國體の莊嚴にして、祖宗の御威徳の盛なことを説き、自分は不肖にして、此位に即いて、爾等の力を藉らんければ出來ぬと

云ふ風に恐懼其任に堪へんやうな事を仰しやる。さうして人民の忠誠の心を勵されたものです。威嚴のある中に親愛の情が充ち満ちて居る。今日教育上倫理杯を説くに當つて、宣命の文章を十分噛み砕いて其中の言葉を説くのは面白からうと思ひます。謀叛する人などに宣命を御下しになつて、斯う云ふ謀叛をするのが聞えて居るが、段々考へて見ろ。斯う云ふとをした者は、榮えた者はない、思ひ止つたが宜からうと云ふ御諭がある、然るに、思ひ止らずして謀叛をした後に又宣命を御下しになつて、御前にあれ位説得をしてあるのに、其志を改めずに謀叛をしたから止むを得ず罰すると云ふので、恰も母親が子供を叱るやうに、威嚴の中に親愛の情が含まれて居るものが、宣命の中に澤山あります。宣命を研究するに文學の方面からでなく、此方面から御研究になつても、大層面白からうと思ひます。威嚴のある所は祝詞と同じであります。祝詞は何時でも稱辭竟奉久止宣と云ふことを繰返して神様の名を擧げて幾段にも切れて居るが、宣命もさうで、一段ごとに大詔乎聞食止宣とい

ふことを繰返して親切に説いて居るのは、よく似て居ります。これも昔は隔つたものである。節を付けて隔つたらしいが、どう云ふ風にしたのか、其節は分らぬ。宣命を御覽なさるには、

○ 歴朝詔詞解

本居宣長

と云ふものを御覽なさい。

是で上古の文學を終へました。上古の文學は今申した通り韻文の時代であります。これが三韓交通時代と隋唐交通時代とに分れます。隋唐以後は、支那文學の影響を受けて、歌の形勢は一變しました。一般文化の發達につれて、廿卷もある万葉集が出来ました。昔からの遺聞も筆記されて歴史も風土記が出来ましたが、國文學の散文はまだ發達しない時代であります。漢文學を自由自在に使用して、國音を寫した時代であります。これが即ち万葉假名であります。万葉假名の用ひ方は祝詞宣命には万葉程戯れ書などはありませぬ。これは其性質にあることでございませう。かやうに長く漢字を使ひまして、遂に其漢字の一部を省略して

假名を作るといふことが起つたのであります。假名が出来てから國文が大に發達します。之は中古の文學で明日御話いたしませう。

正

第四講 中古文學の一

今日は中古文學に遣入つて御話をしようと思ふ。

此中古時代即ち帝都^{京都}に遷りました後、鎌倉幕府の出来るまでの間を平安朝又は王朝時代などいひます。何時として王朝でない時代はないのですが、鎌倉の幕府が開けて後は、權力が自ら武家の手に渡りましたから、それと相對照して、此時代を王朝時代と唱へて居るのであります。此王朝の最も盛な時は、我國に於て文學の盛に起つた時代であります。御存知の通り、この時代はいはゆる藤原時代で、藤原氏が攝政關白として、天子を補佐し參らせ、同時に我が儘をやつた時代であります。不思議な因縁には、文學の盛衰は藤原氏の消長と親密な關係を持つて居ります。初めの百年間は藤原氏がまだ政治上の大權力を恣まゝにしませぬ。藤原氏が外戚を以て政治を取計らふことゝなつたのは、清和文徳以後です。其以前には國文學の方でも著しい出來事はありませぬ。こ

れを平安朝文學の第一期といつて宜しうございます。次に清和文徳以後の朝廷は全く藤原氏と一の家のやうになりました。段々と門流も殖え、御堂關白道長の代に至りましては、榮華の極點に達しました。御堂關白道長は藤原氏の榮華を一身に集めた人でありました。此時代が我が文學の最も盛な時代、中古文學の最も盛な時代でありました。それから後三條天皇以後になつては、藤原氏の權力が次第に衰へて、武家の天下になり、源平二氏が起つて來るやうになりました。文學も此時期には稍や下火になつた風があります。平安朝の文學は藤原氏と其消長を共にして居るといふのは、面白いことであります。

藤原時代は騎奢文弱に流れた時代であつたと見えます。佛法は奈良朝の末から平安朝になつて、益々盛になつて、名僧智識も數多く出ましたが、一方に於て迷信の考も、一般の人心の中に根強く侵染して來ました。漢學も平安朝の始には中々盛になつたのである。所が段々と藤原氏の門流が盛になつてからは、藤原氏の門流でなければ名譽の地位に達せら

れぬといふ風になりました。騎奢は日に進んで辯佞利口の世の中となり、人の氣骨がなくなつた。地方では大寶令の制度も段々壞れて、封建の用意が次第に出來掛つて居る。郡縣の制が失はれて豪族が各地に起りました。然るに朝廷の公卿は朝から晩迄詩歌管絃に耽つて、風俗壞敗は著しい事です。其時代の風俗の壞亂したとは、歴史に於て明白であるのみならず、文學が即ち證據立て、居ります。此時代に出了た文學の性質は、問はぬでも分つて居る通り、飽麗纖弱、誠に女らしい者であります。此時代が女の様な時代でありますから、其反映が文學に現はれて居ります。そうして又新しい國文を自在に書綴つた人は、大抵女子でありました。清少納言、紫式部以下名高い名媛が多く出ました。上古の文學は韻文の世ですか、この時代に至つて散文の世となりました。併し此時代の文學は我國の國文が始めて盛になつた時代ですから、自ら後世の模範文學と見做されてあります。それ故世間には國文といへば、この時代の歌文と心得て居る人もあります。總論にも申しました通り、國語の性質が柔

かいで女らしい文學には最も適當したのかも知れませぬか、兎に角始めて發達した國文學は、誠に柔かい女らしい文學でございまして、漢文を作るとが男の事業になつて居りましたから、女子は女文字、即ち假名を利用して、國文を發達させたのであります。花やかな平安朝の世は、花やかな文學によつて飾られて居るのであります。

平安朝文學の第一期藤原氏の未だ勢力を得ない時分、即ち清和文徳以前には我國文學には餘計な産物はありませぬ。此時分は皆支那の詩に趨つた時代であります。嵯峨、淳和の二期の如きは最も盛で、

凌雲集 文華秀靈集 經國集

の如きものは兩朝に勅撰になつた書物であります。是等は皆漢文漢詩を集めたものであります。此時分は六朝唐初の風を學んで、七言の詩なども作るやうになりました。この様に漢文が流行した事が後に國文の起る基礎であります。詩の勅撰集が出た時代が後に、歌の勅撰集が出る用意の時代を形作つて居ります。歌の事は一時衰へたやうに見えます。

がこれが後に至りて又復興します。國文の繁榮した時期、即ち紫式部や清少納言の文章は、皆漢文の素養があつて出来たものといふことは注意せねばなりません。經國集などの中にも、女子の作者があつたといふ事、即ち女でも漢學をしたといふは注意すべき事です。

此平安朝の初期の文學として一寸御話して置きたいと思ひますのは、神樂歌、催馬樂歌のことです。之は寧ろ奈良朝の末から、そろそろ始つたものでございませう。前回に万葉集の歌は最早目に訴へる文學になつたことを御話しました。古今集以下歴代の歌集は皆其系統を引いて、目の歌文人の翫ぶ歌になりました。これは漢詩を翫ぶ風が移つて、詞藻を翫ぶ様な譯になつたのです。然るに又一方には神樂歌、催馬樂歌と云て、囃はれる歌が出来ました。曲に合せて囃ふのは神樂歌、催馬樂歌となつて發達した。後世の俗曲はこの方の系圖を引いたものといつて宜しうございませぬ。神樂、催馬樂といつても二つ並べていひますが、唯今は神樂歌が五十首、催馬樂歌が六十首ばかり残つて居ります。ずつと

神樂歌、催馬樂歌

昔に遡つて申せば我が國の歌舞の起源といふものは神様の前に歌ひ舞ひするより起つたものであります。かの天窟戸前に歌舞をなすつたといふことを見てもこの事はよく分ります。神樂歌はつまり神樂の時に奏でられた歌ではじめに庭燎の歌といふのがあり次に採物の歌といつて神やら弓やら手に採つて舞ふ時のものについての歌がありま

す。それ等はほんの儀式のもの故文學上からは格別の價值もありません。三十一文字の歌を一句か二句か繰返し／＼歌つたと見えます。本末と二首つゝあるのを見れば二人で囃つたものでございませう。神樂歌の中に前張歌といふのがあります。これが採物の歌などとは違つて大分面白いものです。これは神樂の儀式のあとで餘興などに歌つたものです。これが即ち催馬樂といふものと同じものらしい。催馬樂と申すものはもと俗謡で誰が作つたともなく行はれたものでございませう。その中から神樂の後の餘興に用ふる爲め曲を付けて選んだのが神樂歌中の大前張小前張だらうといふ説です。それですから神樂歌、催馬樂歌

といひましてもつまり催馬樂の方が價值の多いものでございませう。かやうに當時の童謡などのやうなものが一般に廣く行はれて下流社會のみではなく上流の人までも御歌ひになつたといふことは源氏物語などを見ても分ります。此頃は酒宴でもあれば其餘興には必ず催馬樂の歌を歌うた様に見えます。源氏物語にも催馬樂の曲の名を取つて卷の名にしたのが東屋竹川など一つ二つあります。

催馬樂歌はあたり前の歌とは風が變つていはゆる俗謡ですから餘程面白い趣向がある。和歌には極り切つた材料しか取つて居ないが此催馬樂に取つた材料は中々面白い。其中には万葉古今などに出て居る歌もありませう。又後世の歌集には催馬樂を本にして作つた歌も往々あります。多くは男女の戀を主としたもので中には随分猥褻なものもあります。葦垣貫川山城妹之門東屋竹川などいづれも面白い歌です。大芹といふのには博奕する事が書いてある。老鼠と云ふのは寺に居る年寄鼠や、若い鼠が御寺の坊主の袈裟を喰ひ破るといふ歌で是等は諷刺の意を

もつて居るらしい。又鷹子と云ふのには鷹の子を一匹頂戴したいそれに依つて鶴を取りたいと云ふ。是等も諷刺の意を含んで、奸臣を除きたいと云ふのかも知れませぬ。或は無力蝦と云ふのがある。力なき蝦骨なき蛭刺と云ふので、是等も何か諷刺したのだらうと思はれます。右等の歌は全く諷刺の意味が無いといふ人もありますが私は多少あるだらうと思ひます。元男女の間の戀を主として擧げたのですが中には諷刺のやうなものもあるのです。卑俗であるが具に人情を言つて居るのは却て歌の儀式張つたのより面白いところがあります。丁度支那の詩經の詩のやうなものであります。日本の庶民の聲として聞えるのであります。言葉も俗語のなまりのはいつて居るところがあります。平安朝に至つては早くも言文二致の端が見えるのです。これ等は古い文學を研究する人はどうしても研究しなければならぬと思ひます。これを研究するに就いて。

神樂歌入綾

橘守部

神樂傳馬樂の

備馬樂入綾

同

と云ふものがあります。又古くは、

梁塵愚案抄

一條兼良

があり、眞淵翁の神樂歌、備馬樂考、本居大平の神樂歌、新釋熊谷直好の梁塵愚案後抄、高田與清の新註などかあります。普通は入綾を御覽になれば宜しうございませう。

其外に又今様歌と云ふものが段々出来掛けて來ました。かの弘法大師の作といはれて居るいろは歌などがそのはじめです。万葉集の五七五七の調が段々七五調に傾いて來ました。此今様歌といふものは尙後に御話するところがあると思ひます。

平安朝の初期は漢學の盛な時代で目に見る歌には著しいものがありませぬが、全くないかと云ふとさうではない、いはゆる六歌仙と云ふ人は丁度此時分に出た人々です。僧正遍照、在原業平、小野小町、大伴黑主、文屋康秀、喜撰法師之が六歌仙で、古今集に此六人がのつて居るから、後

世六歌仙と云つて貴びますが、これは前に御話した通り、万葉集の先輩に柿本人麿、山邊赤人が居つたと同じく、この人々は、延喜の古今集時代の先輩になつた人であらうと思ひます。丁度万葉集と古今集の間に居る人で、其時分に歌名が高かつたから、六歌仙といはれたのであります。其中で小野小町、在原業平、僧正遍照などは、歌の集もあつて如何にも上手な歌よみです。文屋康秀、大伴黒主、喜撰法師等は、歌が一首か二首しか傳はらない。喜撰法師は百人一首のわが庵はと云ふ歌一首の外はない。それで六歌仙の名を得て居るのは、つまり古今集の序文に取られたからであります。古今集の中に、読人知らずとあるのがこの頃の人の歌です。

文章の方はどうかと云ふに、いはゆる物語文は第二期の時代に多く出ましたが、其の魁となつた竹取伊勢の二物語は、丁度この清和文徳邊りに出来たかと思ひます。伊勢物語は即ち六歌仙の一人である。在原業平の事蹟を書いたものでございます。此二つの物語は同じく物語といひ

ますが、性質は少し違つて居ります。伊勢物語は在原業平の行跡を歌に依つて書いたもので、歌が重になつて居ります。文章は歌の序の如くなつて居ります。さうして書いてある事柄は實際の事實である。所が竹取物語は全くの作り物語で、且又文章を主としたものである。其等の點が伊勢と竹取との相違して居る點であります。文章を較べて見れば、伊勢の方が拙くて簡古で、竹取の方が巧かあつて稍や後世風です。併し、どちらも男女の間の情事が骨子になつて居ることは、後の物語の基を開いて居ります。源氏や何か、今に出て来るぞと知らせた様なものでございます。

さてこの在原業平と云ふ人は、其時分の歌人で、親王さまの御子である。其一生涯の事には色々非難もあります。又色々辯護もありますが、兎に角行跡から見れば、放蕩無頼の人でありました。其事を歌によつて寫出して居るのが、伊勢物語であります。それ故其中に書いてあることは、今日から見れば、如何はしいことも澤山あります。學校などでは、讀めない

No!

書物であります。今日の俗語であれを書いたら大變であります。此伊勢物語と云ふものに依て、既に早く平安朝の淫靡なる風が示されて居ります。作者には色々な説があつて一定しませぬ。伊勢と云ふ女があつて作つたと云ふ俗説がありますが、これは紫式部が源氏物語、清少納言が枕の草紙、和泉式部が和泉式部日記など、それ／＼書いたものがあるから、伊勢が伊勢物語を作つたものだらうと考へたのでせう。在原業平が自分で書いて置いたのを、後の人が多少の附加へをしたのであらうと云ふのが一番善い説かと思ひます。この物語は、物語の魁として歌よみの讀むべきものとなつて居りましたから、其方から一番盛んに讀まれました。歌をよむには古今集、伊勢物語は是非とも讀まなければならぬ様になつて居りましたから、その註釋書は實に澤山あります。足利時代にも澤山出来ましたが、徳川以後の分だけを擧げれば、

伊勢物語註釋

- 伊勢物語拾穂抄 北村季吟
- 伊勢物語童子問 荷田春滿

勢語臆斷

釋 契沖

伊勢物語古意

岡部真淵

伊勢物語傍註

加茂季鷹

勢語圖抄

藤原彦磨

添註伊勢物語

清水菟臣

伊勢物語新釋

藤井高尙

又明治になつて出来たのは

伊勢物語俚言解

佐々木弘綱

先づそんなものぢあらうと思ひます。

竹取物語の方は伊勢物語に較べると面白い所がある。作り物語である。と云ふことか面白い。始めて我國に作り物語が出来たのが面白い。千年以前に是程の書物が出来たのは、世界文學史の上に於て面白いことである。伊勢物語はぼつ／＼切れ／＼の話を集めたのであります。竹取物語は話が完結して出来て居ります。之も矢張平安朝時代の文學の特性

竹取物語

を現して一人の女を澤山の男が争ふと云ふ作り物語です。即ちかくや姫と云ふ女を澤山の男が互に争ふのであります。石作皇子、車持皇子、右大臣阿部御主人、大納言御行、中納言石上麿など云ふ歴々の人々が役所へも往かぬと見え、朝からかくや姫の許に詰り掛けて居る。此人達がかくや姫から難題を言かけられて佛の御石の鉢、火鼠の裘など、色々の珍物を求めようと骨折りますが、前の人は姫を欺かうとして失敗しますが、後の人程馬鹿正直に難題のものを取りにゆき、ひどい目に逢ひます。最後の石上麿などは、燕の子安貝を取らうと、高い金を掛けて足場を作り、自分で燕の巢を探つたところが燕の糞を攫んで足場から轉げ落ち、怪我をしたと書いてあります。此かくや姫は元と月の宮から来たので、遂には天子様の需めにも應じないで天上に昇つたと云ふ作り話ですが、これは結構が完備し、鉢載が整うて居るのみならず、滑稽の中に諷刺の意も見えます。一鉢竹の中から人の出て来たこと、佛法の中にゐると云ふことで、寶樓閣經と云ふものにあると云ふことです。それ

竹取物語註釋

等の思想が早くから廣かつたものと見えます。月中の女子と云ふ者は佛敎にもありませうが、これは支那の方の思想から遣入つたのではないかと思ひます。その舊話によりて五人の男を出し滑稽的に諷刺的に書著したところがこの物語作者の手柄でございませう。これも作者は分りませぬ。源順の作といふ説もありますが、もつと古い事は明かでありませぬ。竹取物語註釋で宜いのは、

竹取物語抄

小山伯風

竹取物語解

田中大秀

と云ふものです。明治になつて出来たのは、佐々木弘綱さんの竹取物語俚言解と云ふものがある。俚言解は本文が能く校合してあるから善い様です。竹取物語は外國語にも反譯されて居ります。英吉利人の Dickens と云ふのが、土佐畫の美しいのを入れて反譯して居ります。此反譯は誤りが多い。一鉢この人は、百人一首の反譯をしてむべ山と云ふ山があると云ふた人です。餘程間違の多い人ですが、詰りこの人に教へた日本人

がいゝ加減などと言つたのでせう。もう一つは Lange と云ふ人の編譯
 です。此人は日本に長く居つた人で、俗語文典を作り、古今集の春の歌な
 ども反譯した人でありませう。この方は間違が少ない様です。
 平安文學の第二期は延喜時代から始まります。この時代は前にも申上
 げた通り、最も盛んな時代で、歌では和歌三代集の現れた時代、散文では
 源氏物語と云ふ物語の親玉が現はれ、清少納言の枕の草紙なども出来
 た時代であります。これが文學の模範になる時代、後世の文學が皆そこ
 から模範を取つて、そこに重きを置いて居る時代、即ち中古文學の中樞
 の所でありませう。この事を少しも話しませう。
 万葉集の濟んでから、百年ばかりの間は詩が盛んで歌は衰へ六歌仙の
 やうな人があつた計りで、歌は一般に行はれて居らなかつた。所が醍醐
 天皇の時分に再盛になつて醍醐天皇のときに和歌の勅撰があつたの
 が古今集です。この古今集が始めてそれから續いて和歌二十一代集と
 いふものが段々出来るやうになりました。其の古今集を撰んだ人々は

紀貫之

紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、この四人です。筆頭は貫之でありま
 す。この人は官途の仕進は餘り高い人でない。土佐守になつた人である。
 その任が満ちて京都へ戻つて来る日記が、土佐日記であります。この時
 代の有名な歌よみでしたから、選み出されて、勅撰集を撰んだのであり
 ませう。歌も文も上手で、文學史上大切な人でありませう。
 加茂真淵は古今集の歌を取つて、万葉集に比較していふには、万葉集は
 餘程男らしい所があるが、古今集は女らしい所がある。これは貫之と云
 ふ人が女らしい歌を作る人で、貫之が撰んだから、自然さうなつた。凡河
 内躬恒などは強い所があるが、貫之は最も女らしい人であると云はれ
 た。けれども、之は時代の影響で、やむを得ぬ事です。貫之のやうな弱い歌
 を作る人が出て、其人が第一の歌の勅撰を作る勢力を得たのも、其時代
 が其人の歌を貴むからで、其人は時代の産物だと云ふとを知らねばな
 りませぬ。貫之と云ふ人も、平安朝の産物で、其時勢の中に育てられた人
 弱い時代に生れて、弱い時勢に相當した歌を詠んだので、其時代の最も

巧みに最も進んで居つた人に違ひない。其時代の精神を最も能く得て居つた人です。當世の人が貫之の歌を喜んで持囃したのも當世に合ふて居つたからである。延喜時代の文學は、貫之によつて代表されて居ると云つて宜しいのです。

貫之の歌が古今集を代表するものとして、今其歌について少しくお話を致しませう。貫之の歌、否此時代の歌は、おもに花鳥風月の單一な材料に變つて仕舞ひました。そうして又詞章の巧になつたとは實に著しいことでありませう。即ち修辭上の利巧が大變に進んで來たのであります。今例を以て其話を致しませう。第一には花鳥風月のその景色を見て他の景色や物に譬へる。即ち譬喩法が餘程盛に用ひられる様になりました。例へば、花を見ると雪のやうだといひ、雪を見れば花のやうだといふ。又涙を見ても花のやうだといひ、花を涙のやうだとも云ふ。さう云ふ風に一の景色を取つて、他の景物に比較して、それを上手に言ひ現すのであります。譬喩の外には何の思想もないのです。たとへば花を雪にたとへ

て

同じ色に散りしまがへば櫻花降りにし雪のかたみとぞ見る
鶯の花ふみたしくこの春はいたく雪ふる春べなりけり
今度は雪の降るのを見て花に譬へる。

木の間より風にまかせて降る雪を春くる迄は花かどそみる
春ちかくなりぬる冬の天空は花をかねてそ雪はふりける
こんな流義でやる。それから又櫻か咲き渡つて居るのは雲のやうに見えるると云ふので雲に譬へた。

櫻花咲きにけらしな足引の山の峽よりみゆる白雲
言ひ現し方は種々雑多に違ふが、思想はいづれも同じことです。涙に花を譬へたのは、

やなみれば川風さむく吹く時ぞ波の花さへあちまさりける
花を見て涙に譬へたのは、
櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空に涙ぞ立ちける

篝火を星に譬へたり、龍を糸にたとへたることも度々用ひられて居ります。斯う云ふ風に譬喩するのは、あまり作り過ぎた様に思ひます。もう一つは對照する方法が用ひられて居る。

唐衣新しくたつ年なれば人はかくこそふりまさりければ唐衣の新しく裁つのと人が古くあるのを對照した

白妙に雪のふれは小松原色の緑もかぐるへにけり

白と緑とを對照した。畫家が一方に赤い繪の具を使へば一方に白いものを使ふ。雪が降れば側を黒くするやうに、明白にする爲に對照して使ふのです。

春の色はまた淺けれどかねてより緑深くも染めてけるかな
之は淺いと云ふのと深いと云ふのを對照したので

紅葉はてりて見ゆれど足引の山は曇りて時雨こそふれ

と云ふのは曇ると照るとを對照したので。さう云ふ所に於て、歌の面白味を拵へて居ります。もう一つは人間にない無生物、松とか櫻とか意

思のないものを人間に擬して意思があるやうな風にしたので、擬人法です。これには面白い歌が澤山あります。例へば花が散れば鶯が人間と同じ様に悲むやうに作り、或は櫻が澤山咲いて居るのを見れば春がここへ来たかど云ふ様な歌がある。松だの春だの、雪だの、露だのと云ふ無生物を取つて、それに人間の意思を現出して居るのであります。二つ三つ。

うすくこく色もみえたる菊の花露や心をわきておくらん

紅葉はわかれ惜みて秋風はけふやみむろの山をこゆるん

春くれと草木に花の咲く程はふりくる雪の心なりけり

鳴きとむる物しなれば鶯もはてはものうくなりぬへらなり

秋萩に亂るゝ玉はなく鹿の聲より落つる涙なりけり

斯う云ふ風に無生物に生命を付けて作つた歌が、非常に澤山あります。今挙げた例は、貫之の歌ばかりですが、其他の歌よみの歌もやはり同趣向のが多いのです。例へば二つ三つ。

龍田川紅葉みたれて流るめり渡らは錦中や絶えなん
 春立てと花も匂はぬ山里は物うかるねに驚ぞなく
 谷川にとくる氷のひまことに打出つる波や春の初花
 朝はらけ有明の月とみる迄に吉野の里にふれる白雪
 雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいつれを梅とわきてをらまし
 かういふ趣向を全く取り去つたら古今集は半分以上面白味を失ひま
 す。内容は極めて淺薄で深い思想や想像とてもありません。戀歌の中に
 は中々面白いものがありますが、それもどうしても理屈に落ちる様な
 風かあつて万葉の様な眞摯な情を寫して居らぬ様です。形式の上、於
 て艶麗になり上手になつたのは、逆も万葉集時代の及ばぬ所であると
 云ふことをお話申して置きます。

そこで万葉集は男の如く、古今集は女の如しと云ふのは、どういふわけ
 かといふと、万葉集は質朴で、有の儘の景色を云ふ、有の儘の事柄を言
 うて巧みを求めるとが、少ない。質朴な飾のない所がある。従つて言葉が短

古今集の歌

いから、男らしい所もあり、又雄大な處思想の大きな所もある。古今集に
 なつては、言葉を飾ることが巧みになつて、文學が形式に走り過ぎる。同
 じ思想を色々の形式に依つて現はす様に、見える。要するに、小刀細工に
 なつて自然の處がなくなつた。この時代には最早長歌がなくなつて短
 歌になつた。三十一文字の詩形で歌を言はうとするには、いつまでも万
 葉集通りでは續かぬ。違つた形式を用ひなければならぬ。ところで古今
 集は華奢の時代だから、美しい形を求め、柔い形になつて、形式を弄ぶこ
 とになつたのです。長歌の衰へてしまつたのは、實に惜むべきことです。
 赤人、人麿などが思想を入れて歌の品位を高くした。それが何時しか
 無くなつて、古今集時代では、歌が一種の玩弄物になつて、唯上流の人の
 慰み物となつた。複雑な社會の有様や、悲壯なる人の運命を謳ふことは
 全くない。山上憶良などの歌よみは再び出て來ませぬ。惜しいことには、
 我國の韻文は、長歌が一時万葉集に發達したのに、その跡繼がなくなつ
 て、古今集以後に至つては、短歌となり、それから又連歌が出來て、二つに

分れ、遂には片一方が獨立して發句と云ふ十七の句が出るといふ風に、益、短い形を取つて段々小さく縮つて往つたのです。長い方に發達しないで、短い方に發達したのは惜しむべきことであります。

此古今集の卷數は二十卷、歌數は八雲御抄に一千百首、袋草子には千九十九首とあります。春夏秋冬、賀、離別、福、旅、物名、戀、哀傷、雜、短歌、旋頭、誦、諸、大、歌所の部立があります。卷數の二十卷と云ふことは、万葉集が二十卷だから、二十卷となつたので、是から以後の勅撰集は二三の特別なものを除く外、盡く皆二十卷である。之は古今集が元になつたのです。後の歌集は皆古今集の形式に依つたのです。

古今集の註釋は非常に澤山あります。其中で新しいものだけ、二つ三つ、古今集餘材抄 釋 契・冲

今古集和歌集打聽 加茂眞淵

此加茂眞淵の講釋は門人が書いたものである。それから同じく眞淵のもので續万葉論と云ふものがあるが、之は版本にならなかつた。近頃活

古今集の註釋

版にしたと云ふことを聞きました。俗語で解釋して、誰にも分り易いのは、

古今集遠鏡 本居宣長

です。之には山崎美成が頭書を加へたのがある。それを古今集遠鏡補註と云つて直したのもあります。それから

古今集ひなごとは 尾崎雅嘉

古今集正義 香川景樹

と云ふのがあります。本居、豊、頼、翁の講義といふものが大八洲會から出版になつたものがあります。其外序文だけでも、色々な註釋があります。獨逸人のランケと云ふ人が春の部の歌を古今集遠鏡によつて反譯したのもあります。チャンペレンの日本の詩と云ふ書物にも古今集中の歌が、いくらか反譯してあります。

古今集はこの位にして、紀貫之に立戻つてお話しします。この外に新撰和歌集といふ者もありますが、散文では先づ土佐日記であります。土佐日

土佐日記

記は學校の教科書として、廣く用ひられて居りますから、誰でもお読みであらうと思ひます。之は土佐守の任が果て、京都へ歸る時に作つた記行であります。竹取物語、伊勢物語よりは少し後れて居るが、記行文の最も古きものであります。香川景樹の土佐日記創見と云ふ書物に、土佐日記は貫之か土佐守である間に、娘を亡つて國に歸る時に、其悲みに堪へないから、其心を慰める爲めに滑稽を交へて書いたものだ、と云ふことが書いてある。それは名説であらうと思ひます。土佐日記には滑稽を交へてありますが、これは竹取にも随分ありまして、平安朝文學の一つの特色ともいはれます。總して平安朝の文學は、後世の文學のやうに悲哀の方は少ないので、華奢風流の時代であるから、滑稽などには傾き易いのです。貫之はこの外に、大井川行幸、京などいふ散文もありません。假名文は女文となつて居つた時代に、國文を振興した功勞は没せられぬ事でありませう。

土佐日記の註釋は

土佐日記抄 北村季吟
土佐日記考證 岸本月菴
土佐日記舟の直路 橋守部
土佐日記創見 香川景樹
土佐日記燈 富士谷御杖
などです。

貫之等が古今集を撰進してから四十年ばかりの後、村上天皇の御代に後撰集が出来、間もなく花山天皇の御撰だといふ拾遺集も出来ました。この二つを古今集と合せて和歌三代集と申します。後撰集は村上帝の天曆年中、梨壺の五人と云はれた人々、清原元輔、大中臣能宣、紀時、文源、順坂上、望城と云ふ五人が寄つて撰んだものであります。此五人は万葉集を讀む爲に宮中の梨壺に寄合つて居りました序に撰ひ集めた歌集が即ちこの後撰集であります。古今集に續いて撰んだと云ふので、後撰と云ふ名を付けたのでありませう。之は歌の數がさつと千四百首ばかり、

古今集に遺入らない歌を彼是集めてあります。卷数は矢張二十卷である。此集は古今集程整理して居らぬ。玉石が混濬して居ると云ふ風である。詞書の書き方なども勅撰集として整うて居らぬ所がある。撰者五人の中で紀時文は貫之の子息で、清原元輔は清少納言の親である。是等の人々は皆當入の歌人でありすが、順徳院の八雲御抄といふ本に、大中臣能宣と清原元輔はえらい人で源順も博學であるが、紀時文は親の御蔭で顔を出したのだと云ふことが書いてあります。拾遺集は藤原公任卿が撰んだと云ふ説もあるし、花山天皇の御自撰だと云ふ説もあるが、八雲御抄には公任卿が撰んだと書いてあります。集は花山抄は公任と見るのがよくありますまいか。之は歌数が千三百五十一首あると云ふことであります。後撰の後に落ちたのを拾ふと云ふことであります。これと古今集後撰集を合せた三代集が、中古の歌の粹を抜いた所であります。後撰だの拾遺だのと歌の變遷は私も今研究中であります。概して言葉の上に彫琢を求め、風は段々進んで來て居ます。言葉の上

の遊びと云ふ様なものは次第に餘計になり、後撰集の撰者の源順の如きは、天地星空と云ふ千字文のやうに、四十八字のイロハを網羅したものを、歌の首尾に踏んで詠んで居ります。上にアを付けて下にもアを付ける。上にメを付けて下にもメを付けると云ふ風なことをやつて居るので、又雙六盤の歌があつて中央にカの字があれば何方から讀んでもカの字が來ると云ふ風に非常に面倒なことをやつて居ります。さう云ふ詰らぬ事に骨を折つて歌は益、翫び物になりました。歌人は只管頓智を貴ぶやうになつて、益、歌を弄ぶやうになりました。思想の上に創見を出すも云ふ様なことは却てなかつたやうであります。この後撰集、拾遺集などには註釋物は澤山はありませぬ。契沖の後撰和歌集評註と云ふもの、中山美石の後撰集新抄といふものがあります。又宣長翁の後撰集詞のつかねと云ふ物がある。後撰集の歌の序言などの悪い所に小言を云つた書物であります。後撰集を讀むには備へて置いて宜いと思ひます。古いものでは拾遺抄註顯昭の著で群書類從中にあります。

又八代集抄と云ふものがあるが、八代集の中には三代集も含まれて居りますから、参考して見るべきものです。さて又水戸の學者で吉田令世と云ふ人の「歴代勅撰和歌考」と云ふ本があります。之は万葉集を始め二十一代集に就いて評論などが集めてあります。之が日本の歌史に於ての稍、完備したものであります。文學の内容に迄遡入つての研究はありませぬが、書物の成立當時の批評、後人の批評などが集めてありますから、中々完備したものであります。之は五六年前に近藤活版所で版にしました。

第五講 中古文學の二

和歌三代集の出來た時代が即ち物語の最盛時代でありまして、中古文學の最肝要な時代であります。中古文學は物語によりて代表せられて居るのであります。前にもお話ししました通り、伊勢物語、竹取物語などが、物語文の陳吳でありまして、それから段々大きな物語が出て來ました。源氏物語が出て來るまでには、小さな物語が、どの位出たか知れませぬ。源氏のやうな大きな物語が、突如として現れて來るものではありませぬ。今日残つて居るものは、極く僅ですが、後撰集の頃に出來たものに大和物語といふものがあります。之は性質に於ては伊勢物語に似て居るものである。さりながら伊勢物語の如く一人の行跡に就いて書いたものではない。實事物語であることは伊勢と同じです。伊勢の系統に屬するものといつて宜しいのです。それ故葉平の子息の在原滋春と云ふ人の作だといひ傳へて居ますが、これはやはり俗説です。御父つさんが作

大和物語

つたからといつて息子が必ず作らなければならんと云ふ譯もないのです。花山院の作だといふ説などもあります。書名の「大和物語」といふに ついても色々説があるが、兎に角伊勢物語といふに對して付けたものでせう。文章は簡潔ですが、伊勢よりは當世風な處があります。有名な娘捨山の話、采女が身を投げた話などが出て居ります。八雲抄に伊勢、大和源氏は歌人の見るべきものだといふことが言はれて居ります。それ故歌人が大層貴んだものなのです。これには北村季吟の「大和物語抄」井上文雄の「冠註伊勢物語」などがあります。其外住吉物語と云つて今残つて居るものがあるが、これは名ばかり残つて昔のとは別の物の様です。今のは繼子いぢめの物語です。これと同じく落窪物語と云ふのがあります。やはり繼母が娘をいぢめることを書いたのです。此時分の有様は一人の男で澤山の妻を持つて居りますから、従つて繼子いぢめなどは澤山あつたことでせう。源氏物語の中に、其頃の物語の評判をして、繼子物語の多いといふことが書いてあります。とりかへばや物語と云ふのがある。

住吉物語

落窪物語

源氏物語

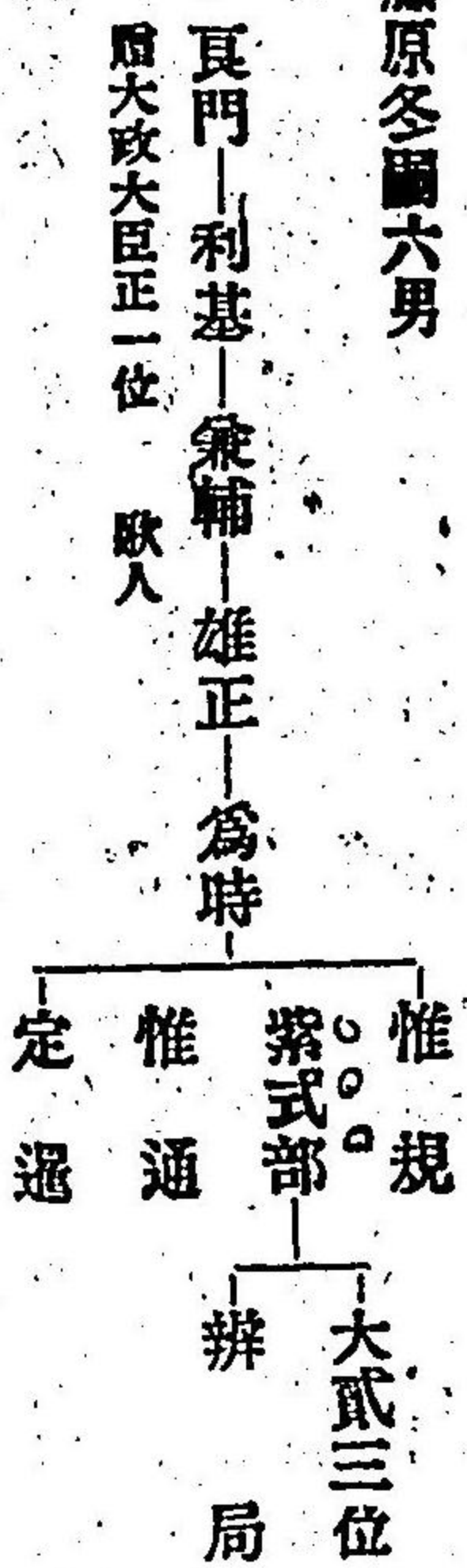
うづら物語

活潑な男のやうな女と、女のやうな男があつて親が取換へたら宜からうと思つて居ると云ふ物語です。これ等はよく此時代を代表したものであります。さいがさう云ふやうな様々な物語に書いてあることは、大同小異、大方は男女の情話を材料として居ります。つまり腐敗した上流社會の反映に外ならぬ事であり、其外色々な古物語があつたが、今日に至つて亡びて仕舞つたものが数限りもなく多いことです。源氏物語や枕草紙の中に名の見える丈けでも、交野少將物語、正三位など申すものがあります。今の黒川さんの御父さんの春村先生が書かれた古物語類字抄といふのを御覽になれば、色々な名が見えます。これ等の物語が段々發達して、遂に源氏物語の様な大物語が出来たのです。源氏物語が平野の中の山のやうに突然として出て來たものではありませぬ。併しながち其物語が大抵亡びて仕舞ましたから、今日では其變遷の見當に付きませぬのは残念な次第であります。茲に一つ言はなければならぬのは、うづら物語です。これは前後錯亂して分りにくい物語ですが、

之は源氏より古い物語の中では大きい物語です。源氏物語と親密な關係を有つて居ます。源氏物語の趣向は大抵この物語から出て居る。この物語を翻案したものであるといふことは注意すべき問題です。後世では源氏が無暗に名高くなつてうつばの功勞を忘れて仕舞つたのです。が源氏物語を知らんとするには、先づこの物語を知らねばなりません。これを見れば源氏の創造力が餘程少なくなつて仕舞ひますが、源氏の淵源も多少認められて面白い事です。この事は細井貞雄といふ人の玉琴といふ書物に種々の考證があります。細井の説によれば源氏は全く其續篇だといひ、従つてうつばの作者は紫式部の父爲時だらうといつて居ますが、これは少しいひ過ぎた説だらうと思ひます。何にせよ、この邊の關係はもつと委しく調べなければなりません。兎に角すべてこれらの物語を根據にして、大きな流れを爲したのが源氏であります。今御話をした物語の中には源氏物語より後に出來たのもあります。源氏物語の作者紫式部と云ふ人は一跡どう云ふ人か、傳記は矢張分り

ませぬ。今日の人々が骨折つて調べると知つたなら、其時分にもつと書いて置いて呉れたのだらうと思ひますが、何もなくて分りませぬ。水戸の學者の安藤爲章と云ふ人が紫式部日記などを根據として紫家七論と云ふものを書きました。それに依つて見るとこの人の生涯が稍分ります。この人は藤原氏の門流の人です。系圖を簡単に書いて見ますと斯う云ふ風になります。

藤原冬國六男



此系圖を以て見ても家庭の教育があつたことは分る。兼輔は堤中納言物語で知られて居る。其人の二三代後の爲時と云ふ御父つさんは中々學者である。紫式部が子供の時兄の惟規が史記を讀んだのを暗んじたと云うてある。子供の時から御父つさんが男にしたら宜からうと云う

たのを見ても非凡な才論を持つて居つたと云ふことが分ります。此時代は女が中々學問をする時代でありましたが、後に藤原宣孝と云ふ人に嫁しました。其時分學者の女は亭主を殺すと云ふ評判があつたさうですが、果して亭主が死にました。餘り學者過ぎて、亭主は負けて死んで仕舞つたのでせう。宣孝との間に出来た子が、大貳三位と辨局との二人であります。宣孝が死んでからは、寡住居をして居つたので、此源氏物語の出来たのは、恐らくは寡住居をして居つた間に出来たのではないかと云ふのであります。源氏物語の出来たのに就ては、古來色々の説があつて上東門院の御依頼で、石山寺にあつた料紙硯を借りて湖水の月を眺めながら書いたのであると云ふのが普通の説です。紫式部の繪といへば必ず湖水の月が書いてあります。湖月抄などいふ名前もそれから割出したのでせう。末松さんの英譯にも表紙に湖水の月があります。併しさう云ふことは皆嘘だと云ふことを、本居翁の源氏物語玉の小櫛に論じてあります。源氏物語を書いて後に、上東門院に宮仕へをしたらしい

いのであります。紫式部は貞淑温良な人で、當時の女流と其性質を異にして居つたと見えます。當時の女は卓識を衒ひ、女の僻に男をいぢめてやらうと云ふ様なことをやつたが、紫式部はさうでなかつたらしい。源氏物語、紫式部日記などを見ても、當世の女流の弊を嘆息して居ることが澤山ありますから、温良な女であつたかも知れぬと思はれます。且又此時分の女は品行が亂れて居るのが普通で、平安朝は倫理地に落ちた時代でありましたが、紫式部が節操の巍然として動かなかつたことは、御堂關白が權力を以て紫式部を挑まれたけれども應じなかつたこと云ふことです。式部は實に才徳兼備の人であつたと紫家七論には論じてあります。源氏の出来たのは、三十未滿の時、せう、嫁に往つた時、子供の出来た時を考へて見ると、三十前後でせう。四十以上になつては流石の御堂關白も彼は言ひますまいから、さうすると人間の經驗も思想も最も熟した三十才前後の時に、この源氏物語が出来たのだらうと思ひます。

さてこのやかましい源氏物語は一躰どう云ふ物語かと云ふに之は勿論假りに作つた物語であります源氏物語を餘りに崇拜する處から此物語は勸善懲惡の物語であるとか天台の宗義を述べる爲めとか云ひますが物の哀れを知らせる爲めに作つたものだと玉の小櫛にいはれたのは見解の高いこととす即ち人情を主とする爲めに書いたと云ふ意見が正しいのです詰り小説で寫實的に其社會の有様を寫出した小説に過ぎないのです同じ小説でも馬琴の作つたやうなものではない徳川時代の考を以て平安朝を論じてはいかぬのです徳川時代は儒教主義を以て勸善懲惡で押して往くが此時分は勸善懲惡の意などはない社會の腐敗した有様を多少慷慨したか知らんが唯時代の有様を有りの儘に寫し出した寫實小説と見るより外はないのです本居翁は源氏物語には汚ないことも書いてあるがこれは蓮の奇麗な花を見ようと思へば泥水を貯へなければ見られない濁つた戀を書いたのは人情を書きたいのが主であると云はれて居ります小説家や詩人と云ふも

のは情と云ふものを寫し出すのが主でありますから論語や孟子と同一標準で見られては困ります次にこの小説はどう云ふ趣向で出来て居るか云ひますと大躰は假構であるけれども幾分か當時の事實を書入れた事はありますやばらばらに離れた實事を聯關して配合したことはありますやばらばら作者の伎倆ですいはゆる詩想といふものゝ働きはこゝにあることとす然るに實際の事實に似たことがあるから事實を書いたのだと云ふは恐なこととす源氏物語は先づ二つの部分に分けて見るとが出来る一つは前篇四十四帖—源氏物語は五十四帖から成立つ次は後篇十帖これは宇治十帖と稱へます即ち源氏物語を大分して二とし始めの四十帖は光源氏の生涯を寫したもので宇治十帖は光源氏の子息の薫大將の生涯を寫したものです前篇は如何にも華美で賑かであるが後篇は沈鬱で物寂しい所がある前篇四十帖は万事光源氏の思ふ儘になつて自分の望は必ず仕遂げると云ふことですべて圓滿なる生涯を寫

したものです。が、後篇の宇治十帖は万事盡く齟齬するのである。始めのは圓滿なる戀で、後のは不満足なる生涯、失戀であります。この前後篇が相對して全部の趣向を拵へて居ります。宇治十帖は大貳三位の作だとか、後人の作だとか云ふ論は、此源氏物語を能く見ない議論で、兩々相對して面白味が出来るのです。殊に宇治十帖の人物を現し出した手柄は、始めの四十四帖より手際が進んで居るやうに思ひます。さて前篇の主人公は光源氏であります。此人は天子様の御子様で、才貌兼備である。其人の生れる有様から書いてある。母は藤原氏でないから、外戚の勢力が薄い。が、人としての榮華は、盡くこの光源氏に集つて居ります。外戚の弱いことはかへつて、人の同情を惹起しますから、先づ當時の目から見て理想の男子と云ふべきものは光源氏でせう。好色のことはもとより缺點に相違ないが、これも今日の眼から見れば、いけませぬ。當時の眼から見れば、この位の身分の高い人が、^{ニの位}様々の好色の事をするのは、當り前のことで怪しい事ではありませぬ。但し、輕薄な行は昔も今も嫌ひます。源

氏はさう云ふことは大嫌ひです。立派の人ですから、どんな女も自由自在になる。併ながらそれを輕薄に捨て、仕舞ふと云ふことは、當時の外の人はいざ知らず、源氏は大嫌ひであります。源氏が若い時から年取るまで、寵愛した女は、澤山ありますが、皆何時までも世話をし、何時までも可愛がつてやらうと云ふ哀憐心の深い多情な人として、寫されて居ります。中々強情な人で、自分の思ひ出したことは、仕途げない内は止まぬが、一旦我意に従はせたと上は、いつまでも世話をしよう云ふやうな氣質に見えます。この物語中には、幾多の女を出して、一人の貴公子、光源氏の周圍に結付けて、女の種々の標本を示してありますが、一人の性質を別々によく寫出してある手際などは、後の小説家の及ばぬ所であります。源氏は子供の時孤兒になつたので、母親を慕ふことが甚だ切である。御母さんは天子の御寵愛を受けたが、家柄が卑い爲めに非常に冷遇されて、哀れな有様で死んだ。それで源氏は御母さんと思ふことが特に強い所が、同じ父帝の後宮に藤壺の女御と云ふ女宮があつた。この御

方が自分の御母さんに能く似て居ると云ふ事から、母を慕ふ孝心より起つて、藤壺と云ふ人をなつかしく思ひ、親しむやうになり、遂に道ならぬ物のまぎれといふことになりました。其間に出来た子供を、父帝は御存知なくして、自分の子と思つて、皇太子の位に即かせ、源氏は知らぬ顔で、後には六條院とて、太上皇に準せられます。かく色々の女を寵愛することとは、此時代の貴顯な人の普通のことでありませうが、自分の母とも云ふべき人と道ならぬことをしたのは、體に一の缺點である。その缺點が因果應報で、自分の身の上にて報つて來ると云ふのが、大體の趣意であります。即ち准母に通じた、一弱點が、同様の運命を招いで、自分の可愛がつて居つた女、三宮と云ふ御方が、何時しか柏木といふ人と通じて、子供を生みました。それが、蓋大将である。蓋大将は表面上は、女三宮と源氏との間の子であるが、實際は柏木との間の子である。同じ様な運命に出會つたのである。それは源氏も仕舞には悟りました。これが源氏全體の大血脈です。さてこの源氏の嫡妻に、葵上と云ふのがありましたが、之は源

氏よりも年上で、源氏が喜ばない。この人は六條宮の嫉妬の爲め生靈に取付かれて早く亡くなつた。源氏はその後本妻は娶らなかつたが、其中に紫上といふを本妻同様に寵愛した。これが藤壺の姪に當ります。藤壺を愛慕するところから、藤壺のゆかりを愛すると云ふ譯で、紫上を可愛がるのも、その本をたゞせば藤壺の方から來たのであります。紫上は貞淑で、温良で、此時分の女の標準とすべき人であつた。源氏物語は光源氏と紫上を相對照してあるのである。其他の女にはそれ／＼の一の缺點があり、或は容貌が悪かつたり、嫉妬心があつたり、學問を鼻にかけたり、學問が無かつたり、種々様々であるが、紫上はよく揃つて何も缺點はない。此人は源氏に先立つて死んで仕舞ひます。其紫上が死んでから源氏が快々として樂まぬと云ふ有様で、間もなく跡を追はれた。始めの四十四帖は先づ源氏の生誕よりその死亡までの一生涯を述べて、死亡の處は雲隱と云ふ卷の名だけがあつて、本文がありません。雲隱からあとの四五卷は、宇治十帖に至る連鎖であります。

次の宇治十帖に至つては、始めから慘憺たる有様、最初に零落した勢力のない宮様が御出なさる。其娘が三人斗りある所がそれに、薫大將が言ひ寄るけれども、いづれも成功しない。薫大將は自分で源氏の本統の子でないことも知つて居る。始めから幽鬱な人であり、そこに又匂の宮と云ふのが現れて、この人が薫大將の言ひ寄る女を片つ端から横取りすると云ふ様なことをする。この宇治の宮の妾腹の子に浮舟と云ふ女が、ありますが、之が薫大將と相對した女の主人公である。浮舟は薫大將から言ひ寄られて、それを承知した處へ、匂の宮が又邪魔を入れると云ふことである。遂に匂の宮は薫大將が寵愛して居る浮舟まで留守に往つて欺して、仕舞つたので、浮舟は情に迫られて、兩方に身を委したが、仕舞には切迫つまつて入水したけれども、助けられて、尼になつて居ると云ふ所が結末になつて居ります。浮舟も如何にも哀れな境涯、薫大將は如何にも失望の仕通しです。始めの源氏は情の剛い人で、何處までも情を押し通して、女を懐かせる。薫大將は弱い人で、思ふ事はいつも、齟齬す

目録

る。一方は極めて花やかで、一方は極めて悽涼で、一方は極めて圓滿なる生活、一方は不満足なる生活、斯う云ふのが前にも申す通り、源氏の大駭の趣向であります。唯今申す通りの趣向で、その内部にはいくらかも腐敗した當時の狀態が現れて居ります。源氏の藤壺と通じた事もひどい話です。それと同じく源氏の子夕霧といふ人、嫡出の子が紫の上を懸想したり、繼子が繼母に言ひ寄つたりすることは、澤山あり、一人の女で二人の男に身を委せる事などもいくらかもあります。斯様な腐敗した社會の有様を書いたものを我國文學の第一のもの、いやうに珍重しなければならぬと云ふのも、實は情ないものです。學校などで教科書などにして讀ませるといふことは決して面白からぬことであります。併しながら、その當時の筆で、何しろ大部の物語故、その時分の有様は明に分りますから、歴史をやる人も、語學をやる人にも、大切な好古の材料になるので、研究する必要があるのです。又純粋な文學といふ側から見れば、この五十四帖の中に種々雑多の人物を出して、それに種々の性行を

持たせ、それを活かして居る筆力全軀の文章の力、文學上の伎倆、特にそれが後の文學に與へた影響と云ふものは、誠に大きなものである。我國の文學に於て假名文でそれだけの影響を後に遺したと云ふことは、文學上から見れば誠に貴いことである。國文學歴史の中では、兎に角大立物であります。

まだいくらもいふ事がありますが、限りある時間ですから、先づこの位にして註釋書の重なるものをお話し致しませう。この書は後の世に非常に珍重して、苟くも文學をや、歌學に志すものは、是非とも讀まねばならぬといふ種な事になりました故、その註釋書等は、實に澤山あります。註釋は鎌倉時代から水原抄、紫明抄などいふものがありますが、之に つぎては

- 河海抄 四辻善成
- 花鳥餘情 一條兼良
- 細流抄 西三條實條

源氏の註釋書

林邊抄

林 宗二

岷江入楚

中院通勝

湖月抄

北村季吟

源註拾遺

釋 契冲

源氏物語新釋

加茂真淵

源氏物語玉の小櫛

本居宣長

源氏物語評釋

萩原廣道

等で、契冲から以後が新註です。評釋はいゝ本ですが、花の宴までしかない。それから源氏物語の中の文句を取つて言葉を摘んで書いたものもあり、又源氏物語だけの字引もあり、俗語に直したのもある。源氏物語に關する典籍は實に無数といふべき程です。外國語を御讀みになる御方は末松謙澄氏の翻譯を御覽になるのも御慰みになります。紫式部の書いたものは、源氏の外に紫式部日記と云ふものがあります。これは先刻も一寸と申しました。文章は源氏とは違つて、骨を折つて書

紫式部日記

いたとも見えませぬが、流石に達者なところも見えます。註釋に

紫式部日記傍註 壺井義知

紫式部日記釋 清水宣昭

紫式部の娘の大貳三位には、狹衣と云ふ著述があります。それも今日傳つて居るが、逆も御母さんの片腕にも足らない。兎に角娘も才があつて、御母さんに負けまいと思つてやつて見たのでせう。

清少納言

紫式部の源氏物語と相並んで我國の國文に双絶と唱へられるのは、清少納言であります。皇后定子に仕へて居つたのが、清少納言で、中宮彰子に仕へて居つたのが、紫式部皇后と中宮と相並んで、權力を較べられた花やかな時代は、文學に於ても、紫清兩女が相對峙した時代であります。この清少納言と云ふ人は紫式部などと同じく女の學者であつた。日本書紀を書かれた舍人親王の後である。

この四十五代

肥後守 深養父 舍人親王

下野守 顯忠 元輔 清少納言

父の元輔は後撰集の撰者の一人で、前に申した梨壺五人の一人です。此人の娘であるから遺傳に於て、家庭に於て、十分學問には縁故のある家です。之が皇后定子に仕へたが、清原家の人ですから清の字を付けて清少納言と稱して居つたのです。傳は能く分りませぬが、その著の枕の草紙には種々の方面の事が書いてあるから、此人の見識人物はそれについて窺ふことが出来ます。其人を爲りを考へて見ると紫式部とは性質が違つて居ります。之は此時代の女を代表して、やゝ學識を銜ふ所が見える。さうして男には負けぬと云ふ氣象がある。學才のあるにまかせて、男を虐めたことなども澤山書いてある。香爐峯の雪の話なども分りますが、機敏で頓智があつた人らしい。紫式部のやうに濃厚な所はない、極めて鋭敏な所があるから、其筆は批評的である。其文章にも變化があり、奇警な所があつて、中々強い文章であります。句法にも變化が多い。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

漢學の思想が十分あつて向ふの思想で頭を練つてそれを假名に應用したのであります。漢文を讀みこなす力がなくては逆もあれ丈の文章は出来ませぬ。平安朝に發生したのは假名文ではあるがその根據になつたのは漢文學たることは疑ふべからざる事と思ひます。枕の草子には

枕草子傍註

岡西惟中

枕草子抄

加藤繁齋

枕草子春曙抄

北村季吟

などがあります。

紫式部清少納言二人の外和泉式部とか右木將道綱母とか色々な才女があり、和泉式部日記とか蜻蛉日記とか書物も種々ありますが、其中には自分の經歷を書いたものもあり、作り物もある併し文章にも趣向にもそれ程の大著述もありません。大抵は千篇一律といつてよからうと思ひます。

藤氏全盛の時代が過ぎて、物語文の全盛時代も過ぎました。女らしい時代は段々武家の勢力に推されて來た藤原氏の後宮に育てられた文學は、藤原榮華の有様を寫すやうになつて、榮華物語大鏡など云ふ歴史物語が現はれて來ました。作り物語や女房の日記が、今度は公の歴史と代つて出て來ました。榮華物語も大鏡も二つながら世継物語といつて、甚だ紛らはしい。之は榮華物語が先に出來て、大鏡は其後に出來たものであらうと思はれる。此二つながら作者が誰かと云ふことは分らぬのであります。榮華物語は赤染衛門だと云ふことが傳つが居るが、それはこの時分は女の著述が多いから、赤染衛門にも何か當てゝやらうと云ふ位な考で根據のないと思ひます。伴信友の比古鬘衣といふ隨筆にこの事を論じて、榮華物語の中には紫式部日記なども遷入つて居り、跡裁も一定して居らぬが、女房達が書いて置いた日記を元にして、誰か書加へたものであらう。女の書いた文章を綴り合せたものだらうとらつてあります。村上天皇邊りの御代からして、御堂關白の薨せられ

る迄を書いてあるのであります。これも二つに分れて、一段月の宴の巻から三十段鶴の林の巻までが、御堂關白の薨して仕舞ふまで書いてある。三十二段から四十段までは堀河院の事まであります。これは別の人が書いたのだらうと云ふことです。私の考では榮華物語の上段即ち御堂關白の薨せらるゝまでが榮華物語として早く世に出で居り、その始めに出たものに依つて作つたものが大鏡ではないか、そして後の十段は大鏡よりも後に出たものではないかとおもひます。

大鏡は藤原氏の盛衰とを書きたいのが主であるから、文徳、清和の頃攝關といふとが始まる時分から書始めて、御堂關白の榮華の様を書きつらねてあります。其趣向は大宅世繼と云ふ百五十一歳の爺さんと夏山繁樹と云ふ百四十歳の年寄が居つて、昔のことを話し合ふ風に書いたもので、聽者の批評なども交へ、文章も中々姿致に富んで居ります。歴史の文章の中へ世繼の身振などを挿みたるあたりは、源氏の雨夜の品定めなどから學んだのでありませうが、又彼の佛經などの書方に似て居り

ます。文章の勢があつて強い處は、どうしても女文ではありませぬ。私も先刻も申した通り榮華といふものが世繼物語として行はれて居つたのを利用して、現に大宅の世繼といふ老人を挿へ、支那の紀傳體の歴史に似せて作つたのが大鏡だらうと思ひます。大鏡の中には褒貶を加へる積りで書いたらしい處が澤山あります。大宅世繼が云ふ話は、一通りの賞めて書いた事ですが、脇に居る士や繁樹が非常に慷慨して、藤原氏を悪く云ふと云ふ趣向にして、談話を交へてありますから、非常に面白い所がある。榮華物語は女房の日記を集めた形跡がある。大鏡は男の手になつた者に違ひない。同じやうな假名文でも書いてある事實が餘程男らしくなつて居る。大鏡は史記漢書などの體裁に倣つた紀傳體の歴史であります。大鏡には大石千引の觀短抄といふ註釋がありますが寫本です。近頃落合氏の大鏡詳解といふものか出來ました。こゝに又一つ今昔物語と云ふものがある。これは榮華物語大鏡とは違ふ。榮華物語は有りの儘歴史の年代を追つて、編年體に歴史を書いたも

のである。所が今昔物語は色々の話をまぜこぜに集めたのである。或は奇怪な話がある。幽霊の話がある。其中には事實もあり嘘もあるし、様々の者が交へてありますが、この書によつて其時代の人の迷想風俗などが分ります。男女の間の關係など源氏物語等に書いてあるやうなことが事實の上に澤山あつたと云ふとも分ります。これは源隆國と云ふ人の作だと云はれて居ります。この人は西宮左大臣源高明と云ふ人の孫であります。第三期になつては物語の性質が段々と變つて來ました。作者の方からいつても、女が書かなくなつて男に移つて來た。従つて其書いてある事柄も内容も餘程變つて來た。文體も語句も、幾らか強い風になつて來たです。鎌倉文學になる經過であります。

それから歌集のことを一寸御話しませう。三代集以後また色々の歌集が出來ました。勅撰集の第四は後拾遺集と云ふものであります。歌の數は千二百十八首あります。白河院の時に通俊と云ふ人の選んだものである。其次の集が金葉集。之は源俊賴卿が撰んだ。其次の集は詞花集と

云ふ。それは藤原顯輔と云ふ人が撰者である。其後少し許り經つてから續詞花集と云ふものが出來た。所此續詞花集と云ふのは顯輔の子供の清輔と云ふ人、後拾遺集などの著者である人が撰みました。處が二條院の御崩御になつたので勅撰に遣入らなかつたから、二十一代集の中には數へられぬのであります。併此時代の歌を研究するには勿論一讀しなければなりません。之はたしか群書類從の百四十八卷に收めてあります。其次に千載集が出來た。藤原俊成卿が撰んだのであります。歌が千二百ばかりあります。矢張二十卷であります。それで續詞花集を除きますと、後拾遺金葉詞花千載と四つになります。それに始めの三代集を入れて、七つになる。其次に新古今集と云ふのが出來る。其新古今集を合せて和歌八代集と唱へます。今便宜の爲め暫く千載集迄として、新古今集は近古文學に入れて説きます。積です。堀川院兩度百首といつて、康和と永久年間の兩度に催した二つの集があります。眞淵翁はこれを大層褒められて強い歌の風だと評されました。この時代の歌人は前に申した

撰者はもとより源三位頼政平忠度など武人ながら敷島の道にも秀でて居りました。この頃の歌は思想の上から見ればひどく進んだことなどはないが、譬喩などは益細かになるやうに思ひます。最早花を雪に譬へるのでは面白くない。今度は浪邊に落ちて居る貝が砂の中に混つて居る。それを見て花の散つた結果でないかと訝ります。又鹿の背にある斑紋を星かと怪んで見たりなどする。女郎花か月影に恥かしさうにして居るのは隈なき月に恥かしいのかと云つたり、池中に魚が居る。それが月を見たい。けれども上に藻があつて月が見られぬ。藻を雲と考へて居るだらうか。池に映る月を見れば空が晴れて居るらしいになぜ雲があると思ふだらうと云ふ風に、思想は變らぬが譬喩などは段々細かくなる。花は雲の様だ。雲は花の様だといふ大まかな譬喩はもういひつゝしたので、段々と細かい所へ歌の伎倆が進んで往きます。思想に於ては同じことで、歌の伎倆と云ふものが益細かく進むと云ふことがあるやうであります。段々作り花のやうになるのであります。

今様

朗詠

この頃から歌の學問が出来て、新撰髓腦、奥儀抄、袋草紙などいふ書物は皆この時代に出来たのであります。こゝで一寸申上げて置かなければならぬのは朗詠と今様の事です。今様の形は七の句を四つ並べたもので、唱歌の中にある春の彌生の曙になどが即ちこれです。弘法大師の作つたいろは歌が抑も今様歌のはじめでもとは和讃といつて佛教の方で用ひたものです。それが段々と平安朝の末から盛んに用ひられる様になつて、源平時代へかけては、白拍子と唱へた舞などにもこの今様歌を歌つたものです。祇王祇女などが清盛に呼ばれて歌つたと、平家物語等に見えて居ります。朗詠を歌ふとはもつと前からありましたらう。はじめは詩賦の中のいゝ句を日本風に吟じたばかりでしたが、後には和歌も吟ずる様になつたのです。そこでの拾遺抄を撰んだ公任卿が和漢朗詠集といふものを作りました。この今様と朗詠はやはり催馬樂と同じく謠ひ物で、總稱して郢曲ともいはれて居ります。朗詠の註は玄惠の和漢朗詠集抄釋、永齋及び北村季吟

の和漢朗詠集註などであります。

第六講 近古文學の一

鎌倉の幕府が立つたとは政治上の一大變動で、社會の狀態も之か爲めに一變しました併しながらこれも急激に出來たのではない。平安朝の第二期の時代から段々と變つて來たのである。大寶令の制度が壞れ壞れて遂に頼朝のやうな人が出なければ世の中の治りが付かなくなつたのです。今昔物語などを見れば、其腐敗した有様が能く分ります。源氏物語などを見ても分ります。保元平治の亂には、父子兄弟劔を以て戦ひ、互に殺し合ひました。中央の權力が行れず、地方の豪族が勢力を行ふから天下は已に封建に傾いて居つたのです。そこへ頼朝が清和源氏の嫡流で出かけてそれを押へたので、皇室の方から見れば、誠に勿躰ない次第ですが、あゝ云ふ人が起らなかつたら、もう少しひどい革命が起つたかも知れませぬ。冗言はさておきまして、あの時から明治の世になる迄が、武人幕政の世の中で、天子はあれどもなきが如き有様でありました。

一三二
徳川時代になつて學問は再び盛になります。北條足利の二時代を通した近古文學は概して衰頽した時であります。さりとて此時代の文學も決して輕々に看過することは出来ませぬ。徳川時代の文學は鎌倉足利の變遷を経て出来上つたのです。一旦花が散つて冬枯れになつても其翌年花の咲くまでには絶えず用意をして居るものです。それと同じく、中古文學が徳川になつて復興する迄には始終芽を出す用意が出来て居ります。此事は最も注意しなければなりません。さてこの近古文學をして二つに分けます。第一は鎌倉第二は室町であります。此二つの時代を通して文學は坊主の手にわたつてをります。佛法が大變盛に行はれた時代で、坊主ばかりが學問の道に携はつた時代であります。平安朝では文學と云ふものが後宮の婦人の手にありましたが、鎌倉時代では山野の隱遁者の手に渡りました。それ故平安朝の文學と鎌倉以後の文學は性質に於て非常な相違がある。これは時勢の變動で然らしめたのであります。平安朝の時代は華奢風流の時代、美しい花のやうな時代で

あるのに引變へて鎌倉時代は質素で幽鬱沈痛な氣風を以て充されて居る時代であります。此事は文學のみならず一般の有様に就いても同様です。藤原氏の驕奢を極めたのに反對して、北條氏が相繼いだ幕府は質素儉約を第一としました。風流華奢の事は少しも知りませぬ。平安朝時代の女子の手になつた文學は外形内容共に美麗を極めたものです。武家の世になつては世の中を捨てた坊主が厭世的口調で書きました。時代の變遷は誠に恐いものではありませぬか。鎌倉時代には簡易な宗旨が澤山出来ました。天台、真言などのむづかしい宗旨ではなく、禪宗のやうに坐禪を積んで心を澄せば宜い、經文杯はいらぬといふ様な宗旨が行はれました。これは武士などには適當した宗教であります。又一方では匹夫匹婦を喜ばせる念佛宗が發達しました。一向宗の如き、淨土宗の如き、法華宗の如き、南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經と念佛題目を唱ふれば極樂往生が出来ると云ふやうな無難作な工夫のいらぬ宗教が行はれました。淨土宗、淨土真宗、法華宗の如き日本の宗教は皆この時代に

起つたのであります。最も注目すべきことは禪宗の方から這入つた禪味といふことです。これからは庭園を造るにしても昔のやうに秋の野の自然を樂むと云ふやうな風がなくなつて、こんもりとした常磐木の庭園を造り、番も日本畫の美しい畫の外に洒々たる墨畫を貴び、家屋の作り方裝飾の法も爲めに一變した。いはゆる禪味と云ふことが一般の衣食住の上に餘程の影響を與へて來たのである。その影響が文學の上にも大に現はれて居ります。それで文學も段々眞面目に質素な悲哀の風になつた。平安朝文學に比れば悲哀であつて快活な所が少い。之と同時に強い所幾らか雄健な所がある。正しく其時代の様を反映して居ります。即ち漢語と佛語を混ぜた和漢混淆文が段々由て來ました。此和漢混淆文が追々調和して徳川時代に至り遂に今日の普通文となる基礎を作ります。要するに近古文學は中々大事な時代です。餘程よく調べねばなりません。

源平の戦亂が終つて鎌倉時代そこで此時代になつて出たもので、最も

軍記物語

注意すべきものは、軍記物語即ち保元物語、平家物語、源平盛衰記など、云ふやうなものです。この軍記物が出ましたのは平安朝の末から順序を経て發達して來たのであります。平安朝の物語即源氏物語、竹取物語等に比べれば名は同じく物語といひますが、性質は大さうな違ひがありません。その間には、榮華物語、大鏡杯が出たことは前にも申上げました。平安朝の末には最早造り物語でなくして事實の物語、歴史上の物語を書くやうになつて居りました。それが一轉して戦争の有様を書くやうになつたのであります。文牒から見ても、源氏物語は柔いが、保元物語、平治物語は漢語を混ぜて餘程勇壯活潑になつて居る。其等になるのも、今昔物語杯と云ふ漢語が混つたものが出て來て、段々變化して、さうなつたのであります。記載の事柄を比べて見ても源氏などは大變な相違です。これも一方では榮花や大鏡が其經過點で、平安朝の末に出た漢文の將門記や、後三年合戦記など、結付いて鎌倉の軍記物語が發達したのであります。作者も昔と違つて世の中を捨てた人が書くやうになつ

て來ました。この時代は平安朝のやうに楽しい時代ではなくして、人事變遷の最甚しい時代でありますから自然と厭世の氣を現はして居ります。雲上人の情話はなくなつて武人の功名話が人の嗜好に適するやうになつたのであります。さて又右の種々の軍記物語の外に、南北朝の末になつては太平記が出て居ります。

此等の物語の作者はいづれも分らないのであります。葉室時長と云ふ人が保元平治の作者と唱へられて居る。源平盛衰記平家物語も亦此人の手になつたといふ説もあります。併しこれはあまり容易な説です。何れか一つを作つたか知らんが、盡く此人が作つたとは考へられない。又どれが此人の作とも考へられない。著作の時代も分りませぬが、書いてある事柄の順序と同様に、保元平治などは早く出たものでありませう。文牀の上に於ても柔かい所があります。源平盛衰記に至つては、保元平治から見ると、餘程和淡混淆の度が多い。平家物語は信濃前司行長と云ふ人が作つたと云ふことで、此事は徒然草にも見えて居りますが、それ

も確かには分りませぬ。平家物語と源平盛衰記との關係に於ては、かう云ふ二説がある。平家物語が先きに出來て、源平盛衰記が後に出來たと云ふ説と、源平盛衰記が出來て、それから平家が作られたと云ふ説と二つあります。併しこれも平家が先で、盛衰記が後らしく思はれます。平家物語にもつと事實を加へて十分に書きたい考で、盛衰記を書いたものだらうと思ひます。是等の物語は總て歴史であるが、全く純粹の歴史ではない。餘程潤色を加へたものであります。事實には背いても、面白く書く爲めに色々のことを加へたものに違ひない。文人が小説的に書いた所が多少あるに相違ありません。近頃段々歴史の研究が精密になつてからは、これ等の物語を史料として取るとには躊躇致します。併しそれと同時に文學としての價值は一層加はります。源平盛衰記の方は何時頃出來たかと云ふことに就いて調べた人がありますが、それに依ると、建長年間に出來たのであらうかと云ふ。寶治二年三年と建長元年とこの三年間の中に源平盛衰記が出來たのであらうと云ふ考があるのではあ

ります。さうすると、その外の物語は其前に出来たと見て宜しからうと思ひます。太平記も誰が作つたか之も作者は分らない。玄慧と云ふ坊さんが作つたと云ふ説があるが、各巻毎に違ふと云ふ説もある。近頃修史局の調査に依れば小島法師が作つたと云ふことであります。小島法師といふ人は文中三年頃に死んだと云ふ事である。要するに作者の名が分らないが大抵は坊主が其中間です。坊主の手に文學が歸して居るとはこれでも分るのであります。

こゝに一つ注意しませんが、鎌倉頃に軍記物語が起つたと同時に琵琶に合せて語る事が起つたことでもあります。これは學史の一般の上に於て、餘程注意すべき事であらうと思ひます。平家を琵琶に合せて語る事が一變して足利時代になつて謡曲となつて能に舞ふことになり、それが一轉して徳川の始めになつて芝居が起つたのであります。室町時代の能は鎌倉時代の琵琶法師の物語から轉して舞臺に事實を現はすやうになつて来たのであります。今日に至るまで芝

平家琵琶

居には義経辨慶の事が多い。わるい奴と云ふと梶原が出るといふ鹽梅芝居の材料は多く源平時代に取りつて居る譯と云ふのは、詰りこの歴史があるからです。太平記時代の事柄は良い事柄が澤山あつても芝居にされるとは餘程少いのです。近頃になつて楠公の事などを芝居に作る事も段々とふえました。我々も子供の時から武者繪などを見て義経辨慶とは一番早く近附になつたものです。鎌倉の軍記物語が後の文學に大影響を與へた事は實に莫大といはねばなりません。これは此時分の武士が最早學問がなくなつて来て、目で面白く見るより、耳で面白く聞く方を喜ぶ様になつた。即眼に訴へる文學よりは、耳に訴へる文學として、琵琶で文學を聞くやうになつたので、後世には少なからぬ影響を與へたとであります。かの平家一門の没落は、どれ丈け迄人心に影響を與へましたらう。驕る平家が久しからずして亡びたとはどの位面白い話や、勇ましい風流な話を残しましたらう。木曾冠者義仲は旭將軍で京都に攻登つたが、しばらくの内に又没落して仕舞ひ、義仲や平家を覆へし

た義経も又忽に滅亡した。それだけ勢力を振つた頼朝の後はどうか。二代三代で亡びるとのいふ、誠に有爲轉變はかない世の中です。當時の武士はこの時勢の變遷をどのやうに感じましたらう。自分の祖先の功名手柄の物語などは當時の武士が喜んで聞いたに違ひない。舊幕の話を明治の人が喜んで聞くよりも一層切なる情を以て、祖先の功名手柄話を聞いたのでありませう。琵琶は古くから日本に傳つて居り、源氏物語の中にも、琵琶法師といふとが見えますが、其琵琶の悲しい懐い音に合せて、武家の哀れな物語を聞くやうになつたのは、この時代に始まりました。俊寛僧都が鬼界島で子供に會つた話、袈裟御前が夫の爲めに生命を捨てた話、平忠度か馬を返して俊成卿の門を叩いた話、敦盛が笛を吹いて熊谷に斬られる話などを、哀れな琵琶に當てて、聞いた時代は、詩歌管絃三船の樂みに風流の才を闢はせて、樂んだ時代と、どれ程の差別がありませう。こゝが平安文學と鎌倉文學との相違でありませう。是等の軍記物は異本が種々あつて誠に煩しい事ですが、水戸で出來た

鴨長明の方丈記

参考本といふものに本文を對照してあります。未書も随分澤山ありますが註釋はあまりない。保元平治は中根漱さんの標註位のものでせう。平家には平道樹といふ人の標註がある。太平記は原尤敷の太平記綱目、西道智の太平記、大全杯があります。鎌倉時代の思想を最もよく代表して居る隱遁文學者は鴨長明と兼好法師であります。二人とも名高い隨筆があります。方丈記と徒然草といづれも我國の文學では立派な位地を保つものであります。長明はもと加茂社の祠官で不平の事があつて仕を罷め、後には佛に歸して隱遁した人です。色々著述もありますが方丈記が一番立派なものです。此方丈記を讀んで御覽なさると、明かに鎌倉時代の有様が分ります。一身の不幸な人であるのみか種々の天變地異に遭遇して居る。非常な大風が吹いて難義をし、大火で家が焼け、大地震で人が死に、大飢饉で老若男女餓死し、仕舞にはお寺を壊し、佛像を賣ると云ふ様な次第、福原の都遷りて京都が淋しくなつたと云ふ様な有様を見て、人生の果敢ない、無常なも

のだと云ふ悲哀な感を起して居ります。此時分の人には正しく方丈記のやうな思想を抱いて居つた人が澤山あつたかと思ひます。文牒から見ましても漢語佛語が澤山遣入つて、構造も餘程變つて居ります。和漢混濁文の調和は益々進んで居ります。方丈記には加藤繁齋の方丈記泗流、島昭武の方丈記流水抄など云ふ註釋があります。兼好法師は長明よりは後の人で南北朝にかけて生存した人です。應永年間に死んだ人です。此人の性質に就いては褒貶相半ばして居ります。一幹妙な人間であります。雜駁な人間として評して宜いと思ひます。卜部と云ふのが神官の家であるが、儒老の學問を學んで殊に老學に傾いた人である。仕舞に佛教に遣入つたから學問は神儒佛老を合せた人である。其著述の徒然草が雜駁なとは當然な譯である。此人は博學な人であるが、徒然草に書いてあるを見ても、長明程節操のない人の様に思はれます。長明はまさしく世の中を脱俗して居るが、兼好は名利を離れ得ない所が見えます。長明のやうな面白い行をした人でもなし、思ひ切つ

た隠遁をした人でもないやうに思ひます。太平記に師直に頼まれて鹽谷高貞の室に送る詔書を書いたと云ふ事が書いてあります。この事其の眞偽は固より分りませぬ。併し隨分頼まれたら書かぬとも限りません。徒然草は枕の草紙に似せて書いたものであるか、其書いてある内容の違ふ事は誰の眼にても分る。これ等を御覽なさつても、平安文學と鎌倉文學との差別が分ります。徒然草は道德上の訓誡を挿んだ事か多く書いてあります。非常に尊ばれたものと見えて、註釋書は實に夥しい事で一々擧げるものも面倒な程です。林羅山の鐵、棍をはじめとして數十種に上りませう。加賀の人で、淺香久敬といふ人の作つた徒然草諸抄大成には諸註の說を集めてあります。これに御覽なさい。長明も兼好も和歌には達者で、長明は後鳥羽院の和歌所の寄人となつた人で、千載集以下に澤山歌が見えます。又兼好も當時和歌四天王の一人といはれた位で、中々歌の出来た人です。茲に今一人同じやうな隠遁者で名高い人は西行法師であります。此人

は長明よりももつと以前の人であります。此人は歌の方に於ては、上手な人で、其家集は山家集といひます。撰集抄と云ふものがあつて、それは佛道に志して發心した殊勝な話を書き集めて居ります。此人も鎌倉時代の特性をあらはした人で、脱俗した人であり、漫遊するところが好きで、始めは後鳥羽院の北面の武士でしたが、二十三の年に出家をして、諸國を漫遊して自然の景色を慰んで、歌を作つて、七十三で死にました。二十三から七十三迄行脚をして世の中を送つたのです。其間随分苦しい旅行をして、哀れに世の中を送つて居つたのです。さうも此時代にはさう云ふ人が多かつたかと思ひます。人間の世の中は果敢ない詰らないと云ふことを考へるから、自然行脚などをする風にも傾いたのでせう。坊主になつて旅をする、山川の景色に對して歌を作つて歩くと云ふ様なことは鎌倉室町にかけて盛に行はれたとす。それ故紀行の文章は鎌倉足利に發達のまじつた近頃のやうに涼車に乗つて立派な宿屋に泊つて居れば哀れではありませぬが、其時分の旅泊には随分哀れな

事が多かつたのでせう。その境遇が當時の哀れを喜ぶ筆に上りました。それ故紀行文が深山現れて居ります。この時代の紀行文で學校などで多くの人に讀まれるのは十六夜日記であります。十六夜日記は平安朝の文體を學んだもので、作者も女子であります。書いてある事柄は如何にも悲哀な事で、外形は暫く措き、内容はどうしても鎌倉文學の性質を現して居ります。月を見ても、海に對しても、いつも悲しい哀れな歌を口ずさんで居ります。海の浪の立つのを見ては何時歸れるかと思ひ、三日月の細いのを見て如何にも心細いと云つて居ります。これを土佐日記の讃龍四出するのと並べて御覺なさい。平安鎌倉文學の差別はこゝにても分ります。作者は阿佛と云ふ人で、歌よみで名高い爲家の後室であります。歌集には安嘉門院四條と云ふ名で出て居ります。其の子の爲相の領地を兄の爲氏が押領したに依つて其訴へを爲す爲に鎌倉へ出ける時の紀行であります。その文章の悲しいのも無理はありませぬ。註釋には高田與清の十六夜日記殘月抄

があります。

さて又此時の紀行に海道記源光行東關紀行源親行と云ふものがあります。是等はまた教科書などに讀ませて居りませぬが随分面白いものです。此光行親行と云ふ人は親子で親の光行は後鳥羽順徳の朝廷に仕へて居りました。承久の亂に鎌倉に召捕られたが子供の親行は北條家の方に居つて鎌倉に仕へた人で軍中で源氏物語を講釋したと云ふ學者であります。御父さんが捕へられた時子息か歌を詠して許して貰つたと云ふことです。源氏物語の註釋源水抄は此光行が作つたのです。是等の紀行は文章も鎌倉調で方丈記を讀むやうな心地がします。それ故長明の作たなど誤解されて居ました。其文體は和漢の混淆が全く調和したといひませぬが詩の句を引いたり佛教の語を引いたりして思想は如何にも深遠な處があります。方丈記のやうに厭世的の悲衰な考が多くてよくこの時代の精神を彰して居ります。平安朝の文學に土佐日記があればそれに對して十六夜日記があると

水鏡

いふ様に平安朝の大鏡に對しては水鏡と云ふ歴史があります。之は全く大鏡の眞似をして作つたもので内大臣の中山忠親といふ人が作つたと云ふ言ひ傳へです。大鏡大鏡の眞似をして序文まで似せて居りますが文章も事實も大鏡に較べると見るに足らぬものです。さうして體裁を眞似したと云ひますが大鏡の如く記傳體でもありません。大鏡のやうに一種の熱情を以て書いたのでなし唯大鏡以前の補充をしたもので増鏡と併せて三鏡と稱へられて居ります。中で一番落ちて居ると思ひます。増鏡もやはりこの時代に屬します。普通の説によると一條冬良と云ふ人の作だと云つてありますが伴信友の説によると後醍醐天皇が隠岐より還幸せられた後間もなく出たといひます。私も其説に従つて鎌倉文學として御話します。この増鏡も太平記も南朝方の人のものが書いたのでありませう。すべて學問は南朝の方に多くあります。有名な神皇正統記もやはり南朝方の源親房が書きました。此人は朝廷の功臣で博學な人ですから軍馬倥偬の際にこんな書物を著しました。水

増鏡

神皇正統記

鏡大鏡増鏡と三つを連ねれば後醍醐天皇までさつと分りますが、其間に缺けて居る所がある。これは後に荒木田麗といふ婦人が池の藻屑、月の行方といつて書き足しましたが、それはずつと後の事です。先づ太古から後村上に至るまで聯絡した國文の歴史はこの正統記です。之も勤王の考を以て書きましたが、佛教の思想は多い。そこが即ち時代の影響です。水鏡の序文に天地開闢の處を書いてあるのは印度の開闢説で、神皇正統記に開闢のことを書いたのもそれと同じ事です。昔佛教から出たのであります。此時代の思想は佛教が重なる智識の本源であります。親房公も矢張頭を圓めた人でありましたから、佛教の考は免かれないのです。議論は如何にも壮大で、明快で、文明史とも云ふべきものです。後の新井白石の讀史餘論などは神皇正統記の恩を蒙つて居ること甚くはありませぬ。文牒よりいつても、和文の流暢なのに漢文の勁健な所を以てしたもので、例の和漢混淆文の上乗です。和漢文の混淆は鎌倉から南北朝にかけて親房の如き博學な人の手に渡つて段々と調和を得た

十訓抄
古今著聞集

のであります。次に同じく一種の雜史と見ても宜いものですが、平安朝の今昔物語から系統を引いて居るものに、十訓抄、古今著聞集の二つがあります。之は二つとも建長の頃に出来たもので、文牒のみならず、全く同じ文章もあります。今昔物語に倣つてそれから以後聞き集めた話で出来たのであります。今昔に比べて違ふのは、總論が加へてあつて、訓戒の意味が加はつて居ることです。訓戒を加へると云ふことは、漸く此時代から遣入つて來たので、平安朝の時代には餘りないことです。教へになる書物は、鎌倉頃から出來て、來ました。徒然草にも餘程訓戒の語があります。古今著聞集は橘成季といふ人の作と傳はつて居りますが、どんな人が分りませぬ。今世間に行はれてゐる宇治拾遺物語といふものもこの頃のものだらうといふことです。佛法家の作つた法語の様なもの、此時代のこととして流石に澤山あります。平康頼の寶物集、無住法師といふ坊さんの沙石集など皆此時代の名

高いものですが美文としては如何でせう。向阿上人の假名三部抄といふものは雅文體に書いて文章も中々立派なものです。これには加茂眞淵翁の言釋といふものがあります。

散文はその位でやめて次に鎌倉時代の歌の有様は如何かといふに、千載集についで出たのは新古今集であります。鎌倉幕府の建つて後には朝廷の仕事は益、閑になつた。今では昔のやうに詩歌管絃を樂んで居る公卿達はなくなつた。併しながら歌を作る暇は却て出来たかも知れませぬ。昔のやうな華かな女流の作者は現れて居らぬが、歌を尊む風は益、盛になつて、來ました。朝廷に於かれては後鳥羽天皇、土御門天皇、順徳天皇、即ち承久の亂に御關係になつた三人の天子様は、殊に歌道に御熱心でありました。それ故鎌倉の始めには歌は尙朝廷から出て居ます。文學全體はまだ朝廷を去らないので、散文などに於ては殆んど山野の隱遁者の手に渡りました。歌はまだ九重の雲の上人の手に残つて居るといふ有様であります。歌所を置かれたのも後鳥羽天皇の御代で

新古今集

その寄人になつた人が五六人ありましたが、中にも藤原定家家隆の二卿が、名高い人です。此人は新古今集を代表する人です。新古今集も此定家家隆と道具（たぐひ）有家、雅經、寂蓮と云ふやうな人々が撰集したものです。新古今集の歌は、卷數はやはり二十卷、歌數は總計千九百七十八首と八雲御抄に書いてある。古今集から見ると餘程多いのであります。後鳥羽院の歌道に御熱心などは、承久の役後隱岐の國へ御渡りになつて後も、新古今集を御評點なさつたと云ふことで分ります。

新古今集の歌は、全體にどう云ふ歌かと申しますと、言葉遣は益、華美に流れたのです。即ち歌の體形には益、潤色を加へるやうになつたのであるが、思想に於いては別段新規な思想はなかつたのであります。この時分最も普通に行はれた方法は、昔の人の歌を本歌として、少しもちつて作ることであります。前人未發の思想を詠出するといふことはなく、唯昔の人の歌を踏んじて、その歌を變化して換骨脱躰する所に手際を用ひたのであります。之は、近古文學、即ち鎌倉室町の文學全般に亘つた現

象で、古人の成句を其儘用ふると云ふことが澤山あります。この風は近古のみならず徳川時代までも其跡が認められます。昔の人の詩や歌を綴り合せて、手際のやうに思ふ癖があるのです。謡曲の文章採は、盡く古人の句を繋ぎ合せたのであります。それと同じ様に、自分で作り出す考はなくして、万葉集、古今集などの歌を、本歌にして、作ることが多いのであります。新しい製作をせずして、昔の人の句を補綴することが多いのといふのは文學の思想の衰へた證據であります。平安朝の末からして所謂朗詠と云ふことが行れて、昔の人の詩歌を盛に歌ふことが行はれた。即ち昔の人の歌を誦んするのが、一の修行となつた。さう云ふことを知つて居らなければ、人交りが出来ぬといふ傾きで、誰れでも昔の古今集位は誦誦して居るからそれを當嵌めてそれを元歌として歌を讀む。これが此時代以後の歌の精神でありました。それ故これから後の文學は、益、外形の裝飾に走つて、内容の健全な發達をせず仕舞つたのではないかと思はれます。もう一つ注意しなければならぬのは、平安朝の末

から歌の先生と云ふものが始つたことです。延喜の時代には、師匠はなかつたが、拾遺集の時代には、歌の先生が出来、歌の學問即ち歌學が出来ました。それから學問しなければ歌は作れないものになつた。昔の歌を誦んずるのは、學者の證據で、誦記をするのは、博學を示す方便になる。昔の歌をもぢつて作ると云ふことは一の譽にもなるといふ風なことがあつたと思ひます。さうなれば新しい言葉は、歌に使はない。歌には言文が益、分離して仕舞つて、昔の古語を學ばなければ出来ぬことになつた。それ故次第に古語古言の範圍に狭められ、古い思想の間に束縛されたのであります。併しながら新古今集の長所と云ふものは、形骸に於て變轉を悉したことであります。三十一文字の甚だ小い詩形でありますから、我國の天仁波の多い助動詞の多い詞では、すぐに言ひ古して、同じ様な句調になります。新古今に於ては、其言葉つかひに中々新奇な點が見えます。第一には句の轉換で、當り前の正當な順序ではなしに、ひつくりかへつた形が甚だ多いのです。即ち

折られけり紅句ふ梅の花けさ白妙に雪のふれ

といふ様な風に後になるべきものが前にあります古今集などでは此の形は大變少ない古今集などには眞直な文法上の順序通りの歌が多いのですそれから第二には助辭を省くところが盛に行はれて居りますなりけりなるかななどいふ普通な語尾は皆省かれて居りますそれ故にはゆる躰言どめといふ句が大變多い私が計算した所では古今集全躰で二十首ばかりしかないのに新古今集には春の部だけで其三倍もありません其他ニテなどいふ天仁波も成るべく省きますから歌が引締つて居ります緩みがありますね全躰からいへば漢文の句調に似たところがあります次の歌を御覽なさい

青柳の糸に玉ぬく白露の知らず幾世の春かへぬらむ

下の句などは九で詩の様ではありませんかこれは古今集以後の句法に一變化を生じたものでありますこれは言ひ古した思想を句形の新しいので目さきを變へたのですが漢文漢詩の句調も體に之を促した

といはねばなりません支那の詩の句調が歌に這入つたのは先哲も論じて居るとで其等は詩の句調である詩の句調を入れたから強いといふ所も出來たのですさてかういふ句法の變化といふ中で新古今の形に於て三句切が非常に多いと云ふとは注意せねばならぬとです万葉はもとより古今にもそれは甚だ少いのです橘守部の短歌撰格にこの事がよく關つてある何しろ少いのである處が新古今には大變に多いこれが連歌などになつて歌が上句下句に別れる基です總て新古今の歌から近世文學の性質をあらはして居ります天仁波を省く等杯も俳句などに行はれるとで淵源は新古今から出て居ります古今とは大層な違であります昔の歌を取つて作る一例を挙げませう

淺茅生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき

と云ふのが百人一首にも出て居ります其に對しては

なほざりの小野の淺茅におく露も草葉にあまる秋の夕暮

と云ふ風に作る即ち小野の篠原と云ふ思想は同じであるが中の言葉

を取つて巧みに言ひ變へるのが面白いのです。若し本歌を知らなければこの歌の興味は半分以上かないのです。聯關して面白い詩趣が了解せられるのです。

いざ小供はやも大和へ大伴のみつの濱松待ちこひぬらむ。

といふのは山上憶良の万葉集の歌である。それに對して

大とものみつの濱風吹拂へ松ともみえしうつむ白雪

と云ふ風に使ふ。

たをやめの袖ふきかへす飛鳥風都をとほみいたつらに吹く

是も万葉集の歌である。それを今度

たをやめの袖もほしあへすあすか風唯いたつらに春雨そふる

と云ふ風に直す。万葉では風であつたが、今度は雨にする。それから又別の例を擧げて見れば

梅か枝にきゐる鶯春かけて鳴けともいまた雪はふりつゝ

と云古今集の歌に對して、

0

鶯の鳴けともいまた降る雪に松の葉白き逢坂の山

と云ふのは、尤で前の句を取つたのである。それから

草も木も色かはれともわたつみの涙の花にそ秋なかりける

と云ふのに對して、

にほの海や月の光のうつろへは波の花にも秋はみえけり

と云ふ歌を作り、

白つゆに風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

と云ふ歌に對して、

玉鋒のみちもやとりも白露に風のふきしく野路の志の原

と云ふのを作る。昔昔の人の歌を多少言ひ換へたのである。今一つ

深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり。

と云ふのに對して、

消えなくに又やみ山を埋むらんわか菜摘む野も淡雪ぞふる

かう云ふ風に變へるです。其變へ方に色々あつて二つの歌を元にして

作つたのがあるし、唯一の歌から取ることも二つの歌から取ることもあります。春の部を秋の部に變へ、雪を花に變へることがあります。さうだと断定したのをさうでないと言ふ様に言つた換骨脱胎もあります。併し全たく十四歌を離れて新しい境遇新しい詩材を見出すとは殆どないのであります。歌に歌ふ範圍は益、狭まつて思想は涸渴したとを證明するのです。

もう一つ茲に注意すべきことは、歌が一軒の家に移つて仕舞つたことです。即ち定家卿の家に移つて仕舞つたことであり、一寸序に全躰のことを申上げますが、始めて千載集を撰んだ時に、俊成卿と云ふ人が撰者であつた。所が新古今集を撰ぶ時には定家卿が撰者の一人で、まかも重なる撰者であつた。其の次の新勅撰と云ふ時代は、矢張定家卿である。之は和歌二十一代集の七八九で、其次の十番目に當るのは續後撰である。之は定家の子爲家が撰者です。即ち父子三代勅撰集に與つた十六夜日記に書いてある通りです。即ち歌が一人の家に歸して仕舞ひまし

新古今以後の勅撰集

た。かうなれば、衰頹するのは自然の勢であります。さうしてすべて封建時代の風で、醫者は醫者、法律は法律、禮式は禮式と極つて仕舞つたから、文學もその通りになつたのです。それ故代々一つ宛勅撰集は出來たが、其歌には實に詰らぬものが多い。續古今は矢張爲家で、其次の十二番目の續拾遺集と云ふのが爲氏、其次の十三番目の新後撰集を撰んだのは爲世、十四番目の玉葉集は爲兼、十五番目の續千載は再び爲世、十六番目の續後拾遺は爲藤であつたが、爲藤が途中で死んだから、爲定が撰びました。十七番目の風雅、之は花園院の御自撰、十八番目が新千載で、之が爲定、十九番目が新拾遺で爲明、二十番目が新後拾遺で爲遠、爲重、それから二十一代集の一番最後の新續古今と云ふものが、飛鳥井雅世と云ふ人である。この人は新古今撰者の一人であつた。雅經の子孫です。此人を除く外は皆一軒の家で撰んだものであります。北條氏から南北朝に掛けて短い年月の間にこんな澤山の歌集の出來たのを見れば、鎌倉時代の文學は如何にも盛な文學時代のやうに見える。けれどもそれは思想の

全く酒濁した歌ばかりである。玉葉風雅は一寸一新機軸を出さうとしたものですが、遂に失敗に終つて、かへつて物笑となつたばかりです。第一歌の昔を套襲して居ることは、歌集の名を見ても分ります。三代集の名を固守して新どか續どか云ふことを付けたばかりで、智恵のないことが分ります。茲に系圖を書きましたら、なほよく御分りにならうと思ひます。名の肩にある番號は勅撰集の番號です。



三代續いて歌集を撰んだのが元になつて、歌道が一軒の家に歸し之が三軒に分れて二條、京極、冷泉となつて、互に定家卿の正統を得て居ると主張する。何しろ定家卿でなければ、夜も晝も明けない。定家卿の規則だといつて斯う云ふ言葉を使つてはならぬ。こんな句はいかぬと、つまりぬ法式をつけて、素人には分らぬ様にする。それから秘事秘傳など、唱

へて、詰らぬ事も一子相傳などといふ。これは學問のない時代の通弊です。こんな狹陋な考では、文學の發達せぬのも無理はないことです。さて又かやうな歌道の争が引いて、政治上にまで影響を及ぼして、南北朝の争は歌の争に原因して居るところがあるといふ程です。南北朝時代に、南朝は勅撰集に與つて居りませぬから、南朝の宗、良親王は新葉集と云ふものを御撰になりました。これは後龜山天皇が勅撰に准せられたといふので、水戸では之を番外の十九番に入れて、二十一代集の外に此の集を加へて見ます。廿二代集の歌といへば、其數に於ては非常に澤山であります。此時分の歌は、唯古事秘傳を費ふと云ふので、思想は愈々消耗して、古人の糟粕をしやぶつて居るに過ぎませぬ。歌の生命は全くないといつて宜しうございます。

新古今集の註釋としては前に申した八代集抄の外、本居宣長翁の美濃の家、芭石原正明の尾張の家、芭などです。歌の變遷のことに就いては、富士谷御杖のこしらへた歌ぶくろと云ふ書物の中に、和歌六運辨と云ふ

ものがあります。それから荷田在滿の國歌八論、加茂真淵の歌意考、柳學
それから香川景樹の新學異見など、澤山あります。徳川時代になつての
研究は、それらが見るべきものでせう。國歌八論に關しては、田安宗武、本
居宣長、大菅公主などの辯論が種々あります。それらを讀んで、歌の變遷
を考へなさい。明日は足利文學に這入ります。

第七講 近古文學の二

今日は近古文學の内、足利時代の文學に就いて御話申します。

足利時代は大躰から申せば、鎌倉に引きつゞいてます。學問が衰へ
た時代です。皇室の衰へ方は申すも、恐多い程でした。上古以來我國の文
學は、朝廷に依つて保護されたことが多いので、万葉集も朝廷に接近し
た方から出來、中古時代の物語類は、勿論、鎌倉時代も歌は全く朝廷から
出て居る有様で、朝廷がいつでも文學の保護者でありました。然るに其
の保護者たる朝廷が保護する丈けの力かなくなつたので、文學は益々隱
遁者坊主の手に潜んだのであります。併し中々侮れないのは、その
坊主共です。至尊をも屈從させた足利義滿も、禪僧の前には、辭儀をし
たものです。坊主の力はすばらしいもので、その坊主どもが始終明國と
交通して、色々の文藝を傳へて來たばかりでなく、中々高尙な學問もし
たのであります。國民全體として、學問は缺乏して居りましたもの、坊主

の學問は、隱然として、徳川時代の思想を養成する基礎を作つて居りました。かの宋學の如きも、京都の五山の僧はずつと早くから研究して居りました。徳川時代の惺窩先生や、羅山先生より以前に坊主どもがやつたのです。又將軍家はもとよりその下の大名も、四民の困弊したのにも頓着せず、随分驕奢に暮したもので、従つて公方様の御慰みになる。即ち將軍様の耳目を樂ましめると云ふ方の側のものは、文藝、美術すべて著しき發達があつた様です。詩繪やら、詩書やら、生花、茶の湯といふやうな慰みになるものは、餘程發達しました。従つて文學に於ても、謡曲、狂言と云ふものが、此時代を飾つて居るものであります。連歌も、此時代に盛になりました。之はやはり武家の上流の人の慰みになるものであります。國文學の側では、上流の人の餘興になり、逸樂を助けるやうな文學がひとり發達したのです。只今も申した通り、支那との交通が盛んで、あらゆる美術、工藝が支那から新しい勢力を入れて來た者ですが、文學に於てもさう云ふ傾があります。謡曲なども、支那文學の影響を受けて居る

謡曲

とが甚だ多いのです。此の謡曲や、狂言が、徳川時代の演劇の源となり、この時代の連歌から、徳川時代の俳句も生れて來ます。又御伽草紙といふものなど、つまりは、徳川時代の小説の濫觴です。それ故この時代の文學を、暗黒時代などいは、中々申されませぬ。

第一に謡曲、狂言の起原から申上げませう。謡曲は、則ち今日言ふ能の曲です。猿樂の能の時に用ひる文章、芝居の淨瑠璃など、同じく能を舞ふ時に使ふ章曲であります。それが文學上、價値があります。狂言は能をするとき間に挟んでやる狂言の筋書であります。それ等が皆この時代に發達したものであります。この猿樂の能はどう云ふ風に發達したか、と云ひますと、一鉢我國の歌舞はすべて神様の前で、お祭の時に舞遊んだのが本でありまして、古くは天窟戸の前で、宇受賣命の舞はれたことなども古事記に見えて居ります。中古時代にはお祭のすんだあとで滑巻な所作、今いふ茶番の様なことをしたものと見えて、かゝる業をするをサルガウといつてあります。これは支那の散樂といふ字を動詞に活か

せたるものと見えます。それがつまり猿樂の始めであります。ところが鎌倉時代になつて田樂と云ふものが盛になつた。これはやはり古に始まつたもので始めは百姓が田の疲れを慰める爲めに神様の前で舞をして遊ぶので、田樂といふたものださうです。此田樂が鎌倉の末になると幾らか歴史上の事柄を演ずるやうになつた。即ち實方中將とか、小町とか云ふ様な事柄を演ずるやうになつて、芝居のやうなものになりました。これが田樂の能であります。さて足利の世になつて、例の猿樂が發達しまして、田樂の能のやうに、歴史上の事柄を演ずるやうになりました。これが猿樂の能で、猿樂の能が盛になつて、田樂の能は衰へて仕舞ひまじした。察するにこの猿樂の能は其時代に行はれ居つたあらゆる歌舞の類を巧に合めて仕舞つたのでせう。昔の東遊も朝廷の久米舞も、白拍子の舞の振方なども、悉く折衷して其長所を採つたのでありませう。初めは神前に奏した茶番のやうなものが一變して將軍の前でやるものになり、同時にあらゆる舞樂までも綜合して、衆美を集めたものでせう。

狂言記

それはさておき、文學上から見て大切なのはそれに要する謡曲であります。これもやはり其時分に行はれたあらゆる文學の粹を含めて來たと考へられます。平安朝以來行はれた朗詠、今様歌杯を歌ふとも、この謡曲の中に含ませたのみならず、最大切なものは鎌倉時代から行はれた琵琶に合せて平家を語ることも、遂には謡曲の中に引込て仕舞つたのです。能の中に源平時代の事柄の多いのはこの譯です。能の方から主として云へば、當時行れた舞振りを綜合した。文學から云へば其時分に行れた歌ひもの調りものを綜合して謡曲を作つた。さうして是迄は別々の目的があつたのを、一に纏めて、公方様の御慰みに供することになつたのでせう。さて又狂言は如何にと云ふに、これは謡曲に伴つて新たに發達したものです。元の猿樂は滑稽を主として居つた所が、新しく起つて來た猿樂の能が歴史上の事柄を入れて來て、滑稽と云ふ元素を失つた。それで今度狂言といふことが始まつて、猿樂といふ名は新しい猿樂に譲り、昔

からの滑稽を主としたるものが狂言と云ふ新しい名を以て起つて來ました。それ故本統の猿樂の系統を引いて居る者は、今日の狂言です。併し今日の狂言は昔のサルガウと同じではない。猿樂と狂言とは道を異にして發達して、猿樂は益、歴史的の事實に付いて芝居の様になり、狂言は益、滑稽の形を發達して、滑稽劇のやうになつた。一種の悲しい劇と一種の滑稽な劇とか相對照して、當時の人心を慰藉した。悲しい劇と滑稽な劇と相錯綜して一日の歡を盡したのであります。此時代は一方に於て只將軍の騎奢が、至らざる所ない有様、一方では細民の困難も極まつて居ります。狂言の愉快な有様、謡曲の悲哀な有様、正しくこの有様を現出して居る様に思はれます。

猿樂の發達には從來行れた田樂今様などを集めて大成したといひましたが、今一つ考へねばならぬことは前にもいひました通り、支那の傳奇雜劇といふものゝ影響を受けた事です。之が猿樂の發達を早めたものであらうと思ひます。この事は白石先生の俳優考にもいはれました。

今迄は琵琶で聞いて居つた平語の材料をば、今度は舞臺へ現する様にしたのはつまり雜劇の影響であります。鎌倉時代の人情時は足利時代になつて、念情的演劇時と形をかへました。申す迄もなく今日の芝居は足利時代の能に起因して居るものですから、この猿樂の發達は後の文學に非常な影響を持つて居るのであります。

さてかやうに新猿樂を發達させた人は誰かといふに、昔の猿樂の家の人であります。春日神社とか、住吉神社とか、日枝神社とか云ふ大きな神社には、猿樂の家が附屬して居りました。其春日に奉仕して居つた結崎次郎清次と云ふ男が、其子供の元清と云ふ人親が、觀阿彌で、息子が世阿彌、此親子が足利將軍義滿の寵愛を蒙つた。そこで前申上げた猿樂の能を發達させて新しい猿樂にしたのはこの父子の力が最も多いと申します。此二人の觀の字と世の字を取つて觀世と云ふ家元が出來ました。今日迄も觀世流と云のがあるのは、此人の家である。所が其他にも春日神社に奉仕した家元が圓滿井、外山、坂戸とて三軒ありまし

た。この圓滿井が金春と云ふ家を拵へ、外山が養生になり、坂戸が金剛になり、これが能の四流となりました。

能と今日の芝居とがどこまで関係があるかといふことは十分研究する價值があります。まづ今日の芝居を御覽なさると、花道があつて舞臺がある。あゝ云ふ恰好は、西洋の芝居にはないさうで、日本の芝居には花道のあるのが一つの特色になつて居る。能舞臺ではあれを橋と云ふ。橋を渡つて樂屋から出て来る有様は、全く今日の花道から出て来るのと同じ事でありませう。三番雙なども、能の真似をして居ります。早い時代の芝居ほど能に似て居ります。能が一方に於いて貴族的の娛樂を作つた時に一方に於いて平民的に發達したのが今日の芝居です。もとは河原乞食のしたものであるが、今日になつては段々位置が上がつて、貴顯紳士までも見られるやうになつたのです。その材料から見ても、能から材料を採つて芝居を作つたのが大變あります。近頃は新演劇などとて芝居の事を色々工夫し、淨瑠璃などを研究する人がありますが、能樂の研究は、まだ起りませぬ。これは、二つとも、大層關係のあるものだといふ事は知らねばなりません。

立戻つて謡曲の文章に就いてお話をたしませう。新古今時代では、古人の句を取つて換骨脱胎と云ふ趣向を多くやりましたが、謡曲の文章もそれと同じやうに詩でも、歌でも、今様でも、あらゆるものを集めて、それを綴り合せたもので、それを甘く補綴する伎倆がいかに巧になつてをります。新しい思想、新しい言顯しは少いが、前人の作つた文學の善い

のを甘く配合補綴した所に善い所があるのです。それ故昔の歌や句を知つて居る人には、大層面白く思はれるのです。かやうな事は當時の人の嗜好にはよく投じたるものに違ひない。其代り昔の歌や詩の句を知らぬものには、一向趣味がわかりませぬ。その邊から見ても、平民的のものでない事が分ります。

謡曲を色々分類すると面白うございますが、今は大略に就いての御話をして置かうと思ひます。謡曲の普通にやられるのは、内外二百番です。

た。この圓滿井が金春と云ふ家を拵へ、外山が養生になり、坂戸が金剛になり、これが能の四流となりました。能と今日の芝居とがどこまで関係があるかといふことは十分研究する価値があります。まづ今日の芝居を御覽なさると、花道があつて舞臺がある。あゝ云ふ恰好は西洋の芝居にはないさうで、日本の芝居には花道のあるのが一つの特色になつて居る。能舞臺ではあれを橋と云ふ橋を渡つて樂屋から出て来る有様は、全く今日の花道から出て来るのと同じ事でありませう。三番雙なども、能の真似をして居ります。早い時代の芝居ほど能に似て居ります。能が一方に於いて貴族的の娛樂を作つた時に一方に於いて平民的に發達したのが今日の芝居です。もとは河原乞食のしたものであるが、今日になつては段々位置が上がつて、貴顯紳士までも見られるやうになつたのです。その材料から見ても、能から材料を採つて芝居を作つたのが大變あります。近頃は新演劇などとして芝居の事を色々工夫し、淨瑠璃などを研究する人がありますが、能樂の研究は、まだ起りませぬ。これは二つとも、大層關係のあるものだといふ事は知らねばなりません。

立戻つて謡曲の文章に就いてお話しませう。新古今時代では、古人の句を取つて換骨脱胎と云ふ趣向を多くやりました。が、謡曲の文章もそれと同じやうに詩でも、歌でも、今様でも、あらゆるものを集めて、それを綴り合せたもので、それを甘く補綴する伎倆がいかにも巧になつてをります。新しい思想、新しい言顯しは少いが、前人の作つた文學の善いのを甘く配合補綴した所に善い所があるのです。それ故昔の歌や句を知つて居る人には、大層面白く思はれるのです。かやうな事は當時の人の嗜好にはよく投じたるものに違ひない。其代り昔の歌や詩の句を知らぬものには、一向趣味がわかりませぬ。その邊から見ても、平民的のものでない事が分ります。

謡曲を色々分類すると面白うございませう。今は大體に就いての御話をして置かうと思ひます。謡曲の普通にやられるのは、内外二百番です。

が、其外にも澤山あります。其澤山の謡曲は自ら幾つかの階級に分れま
すが、大跡は千變一律で、同じやうなのが幾つもあります。第一には神事
祝言などに關係したやうなのが澤山あります。もと神前にやつたもの
の遺物と見えて、御世を祝ふ國家を祝すと云ふ丈で、一向芝居的でない
ものが澤山あります。これは一番古い形であります。この種類のもものが
必らずしも皆古いものとはいへませぬが、この種類そのものは古い性
質のものと思ひます。今日の馬鹿ばやしと云ふやうなものもつまりこ
の餘波で次には歴史的のものが澤山あります。例へば牛若が辨慶と闘
ふとか、頼光が蜘蛛を退治するとかいふ様な類です。これは所作を示す
ものです。英雄豪傑の所作を眼前にして見せるもので、これ迄琵琶で聞
いて居つた事柄を舞臺でみるやうにうつしたものです。併しかやうな
事は田樂の時、已に出来たのであります。猿樂に至ての一大發達とし
てみるべきものは幽霊であります。幽霊がなかつたら、謡曲は詰らぬ能
の精神は幽霊にあると私は考へます。

牛若辨慶が五條の橋の上で闘ふといふやうな事は、田樂でもやつたこ
とである。謡曲が最も進歩した形は幽霊にあると思ふ。その幽霊はどう
云ふ風に出て来るかと云ふと、坊主が諸國行脚の途すがら英雄豪傑の
墳墓の跡などへ来る。そこで坊主が古人の運命を悲み、是程力がある人
でもこんな所に埋つて居るかと思つて、懐古の念に堪へない。其處へ幽
霊が現れて来る。其幽霊は初めは近邊の婆さんとか爺さんとかの形に
なつてあらはれて来て、昔の事を語る。例へば義仲ならば粟津合戦のこ
とを語る。坊主は其話を聽いて、益、感に入つて其の跡を弔ふ。さうしてか
の話した者が引込むと、今度は幽霊が本統の義仲となつて現れて来て、
昔の儘の所作をして見せる。即ち一度は假托した形で顯じ、一度は昔の
儘の形で顯はれる。遂には坊主の法力に依つて解脱するといふ風に仕
組んだものであります。泉下に死にきれずにうろついて居つた魂は、こ
の時漸く成佛して佛道に這入ると云ふことに作つたものです。昔の儘
の有様をして見せると云ふ處は、歴史劇、其儘で最後の幽霊の一段が後

に加つたのです。これが猿樂の一進歩です。ありの儘に平家に書いた通りをするのでは、今の芝居と同じことです。どんな英雄豪傑でも、どんな才子佳人でも、盡く無常な力には抵抗するところが出来ぬ。死に就いては等しい運命を蒙らねばならぬ。天地を動した英雄豪傑も一度は土饅頭の下に遁入つて仕舞はねばならぬ。人間の世の中は果敢ないものだと云ふとを悟らせたのが、謡曲の中の最發達した曲と考へます。眼の前に昔の人の所作をしたばかりでは満足しない。それが哀れ果敢ないものになつて死んで、後に成佛するといふまでを示したのです。一例を挙げれば平忠度は軍の最中に歌を詠じた。其風流な大將も遂には源平の戦ひで打死をした。坊主が其跡を弔うて居る處へ、幽霊が出て忠度の物語をする。坊主は感動に堪へないで、忠度の跡を弔つて居ると幽霊は、我こそは平忠度だといつて形を現す。語り過去のことを今日から見ると、やうにした。そこが價值のあるところですよ。佛教はいつでも脚色の根本になつてあります。この時分は随分迷想の深い時代ですから、行脚僧の寂しい

旅行には随分幽霊などには逢ふ筈です。その様な事は實際書物に見えて居ります。

さて又佛力で成佛させると云ふのは人間ばかりではない。柳の幽霊が成佛し、櫻の精が成佛し、或は燕子花の霊が業平のとを語り、雪の霊が成佛するといふやうな非情無心なものまでも人間となつて現れて來て成佛するのです。高砂といつて婚禮の時、謡ふ目出度ものがあるが、これは松の精で、それが種々昔のことを語ります。これらはすべて法華の一切衆生草木國土まで成佛するといふ主義から割出したものに違ひありません。かういふ様な思想は後の芝居にも残つて居ります。

謡曲の中には世話物といつてもいひやうな當時の人情を寫したものがあつた。即ち當時の男女間の關係とか、親子の愛と云ふ様なことを目的にしたのがあります。此時分誘拐者などが子供を攫つて賣ることが流行つた。従つてそれを趣向にしたのが澤山あります。又天狗に攫はれた子が親を尋ねて往くといふやうなものもあります。男女の關係もあり嫉妬

を主としたのもある。仇討を材料に取つたものも、我物を始めとして大分あります。徳川時代になつて始まつたものではありませぬ。古歌を貴んだこの頃の風もよく分る。高砂の謡曲なども一方では高砂住の江の松ですが、一方では古今集と万葉集を代表して爺さんは万葉集で婆さんは古今集になつて居る。さう云ふ風に歌は神聖なもの、勢力のあるもの、歌には日本を改良する力があつて神變不思議なものとなつて居る。かういふ風に歌を貴ぶ所から源氏物語や伊勢物語を貴ぶ。空蟬、夕顔、玉葛など源氏から材料を取つたのが澤山あります。いはゆる源氏物です。小町や業平を材料にしたのが澤山あります。田村などは佛法を貴ぶ所から來たのでせう。其他には平安朝の材料に面白いものがあつても、一向取られて居りませぬ。重なる材料は源平時代から取つてある。その事は前申した平家物語の關係によることと思ひます。もう一つは此頃出來た曾我物語、義経記などの影響でせう。要するに謡曲にはよくこの時代の理想迷想等があらはれて居つて面白いことです。

狂言

謡曲と相並んで著い反對の觀があるのは狂言です。謡曲の文は古人の句を集めて飾付けたものですが、狂言は當時の俗語を並べて少しも古人の句などは入れませぬ。すべてかやうに反對です。一方が保守的なれば一方は進歩的、書れてある事柄も全く反對の觀を呈して居ります。趣向は多く簡單な事で人を騙さうとする。それが發見されてひどい目に會つて逃げ込むといふのが大抵の落です。能の樂が歴史の英雄豪傑の起伏興廢を語る時は、天壤の差であります。すべて日常の社會に於て行れて居る小さな失策、小さな喧嘩を主としたものです。大きな出來事と小さな出來事、悲惨な事と滑稽な事、一方では古文を探つたこと、一方は俗語の儘のこと、どこまでも反對です。併し其發起點は同じことです。其の末に至つて益分れたのです。能の狂言にも御祝ひをするものが澤山あります。これも一方はまじめで、一方は滑稽です。又鬼に關係したと、天狗に關係したことなどは謡曲では實際恐ろしい鬼や天狗を寫して居ますが、狂言の鬼は皆人間にまけます。爲朝、朝比奈などに會ふと閉

口します。見たばかりで腰を抜かす鬼もありません。閻魔が子供に見惚れて養子にすると云ふ様なものもあります。又謡曲中の坊主はいづれも名僧知識です。如何なる英雄豪傑でも坊主に會ふと安じて解脫します。所が狂言の中の坊主は腥坊主ばかりです。金がなくて裸躰になつて二王の眞似をして錢を取つたり、錢を取りすぎて地獄に落ちて閻魔に裁判されたりなどするところが作つてあります。山伏の如きも謡曲では靈験があるが、狂言のは幾ら祈ても利かぬ。犬に吠えられていくら祈ても埒か明かざらう。噛み付かれたりするのが普通です。又當時の大名が多く材料に取られて居りますが、夫等は皆無學文盲で、色を好み、慾張りである。そうして臆病で禮義を知らぬ、壓制であると云ふ、あらゆる悪い方面許り寫してあります。一方の謡曲に於ては英雄豪傑をば英雄豪傑として寫して居るに、一方では當時の諸大名を半文の價値もなく寫して居ります。一面に於ては諷戒の意を示したものと思ひます。之を當時の公方始め諸國諸大名は自分等の嘲笑されることいふも知らず喜んで見て居つたのです。

で見て居つたのです。

そう云ふ風に謡曲と狂言は性質の違つたものであります。それが同時代に現れて互に相對して發達し、當時の人の歡樂を助けたといふのは面白いことです。この狂言には非常な價値があります。謡曲が後世の芝居を作るに價値があつたと同じく、狂言の後世文學を影響したことも大きい。なぜかといふに狂言が全く對話文で曲をなしたところは後世の脚本西洋のどらまの形を具へて居ります。後の小説もこれを手本にしました。淨瑠璃本は謡曲に本づいたもので、脚本は狂言に系統を持つたものです。能の方より云へば無論謡曲を貫んで、狂言を賤しむが文學上の價値よりいへば、狂言の方が價値が多い點もありません。謡曲は保守的で、狂言は進歩的、又平民的である。これは徳川の文學に向つて、非常な影響を與へたものであると信じます。

謡曲については五山僧徒の作つた古抄、加藤盤齋の諷増抄、犬井貞恕釋惠南の謡曲拾葉抄などいふ註釋があります。大和田建樹君の謡曲通解

謡曲の註釋

は簡単に要を摘んで二百何番といふ多くの曲に註釋を加へてありま
すから誠に便利な本です。狂言の方には註釋した書物はない様です。大
和田さんが五六曲撰ばれたのはありますが其の他には知りませぬ。前
に申上げたチャンペレン氏の「日本古詩」に謡曲、狂言ともに二三曲づ
の翻譯がありあす。それからさういふ舞樂などの變遷を書いた歴史に
は小中村清矩先生の「歌舞音楽略史」を御覽なさい。

謡曲もうたひもので半は韵文的散文ともいふべきものです。もう一つ
こんなものが此時代に出て居ります。それは前に一寸申上げた御伽草
紙です。これは足利の末の頃に發達したものでせう。鉢かつき、物真太郎、
御曹司島わたり、唐糸艸子、梵天國杯色々の簡単な話で昔の勇者の話も
あり、當時の話らしいものもあり、多少滑稽の意味を含たものもあり、
繼子が後に出世するといふ中古の物語めいたものもあります。文章は當
世の語ではなくまづ雅文の方ですが、近古の語も大分雜つて居り、中に
挿んだ歌杯も随分まづいのもあります。之もたい目で見ても樂んたばか

御伽草紙

りでなく、拍子に合せで歌はれたものです。それ故文の中には流暢に句
調をよくして書てある處が多い。五七などにすら、どなつて居ると
ころが澤山あります。徳川時代の戯曲は勿論この御伽艸子からの影響
もある事です。小説などはこれから材料を取つて居る事も澤山ありま
す。馬琴の「五七の句調」などは已に御伽草紙にあることです。この御伽草
紙は四五年前、島山健、今泉定介、二君が校訂して版にせられたのがあり
ます。

歌の方はどんなものか。學問は概してない時代ですが、一條兼良其子の
冬良、三條西實隆など公卿様には學者があり、武人には北條氏康や毛利
元就、犬田道瀧など戦國の世になつても、歌文に心掛けた人もあります。
併し此時代に大切なのは連歌です。前に申上げた狂言の中に連歌に關
したものが澤山あります。例へば連歌、盗人などいふのは連歌はしたい
が金がない。それで泥棒に道入ると見付られ、やむを得ず連歌をやつて
わびる。家主もかねて好きな事として連歌を作りおまけに金を呉れて歸

すと云ふ様な趣向です。それを見ても室町時代は連歌が流行した事が分ります。この物は鎌倉時代から行れたものです。ずつと古い所から云へば平安朝の末に金葉集と云ふ勅撰の中に已に連歌と云ふ名が見えて居ります。一つの歌を二つに分けたのはずつと古くからありますが、連歌と云ふ名目が勅撰集に現れたのは平安朝です。鎌倉の始めになつては、一つの歌を二人でやるのでなく、それを幾つも連ねて、第一に發句として上の句をいへば、次の人が下の句をうけ、次の人又上の句をつくるといふ風に五十なり百なり連ねることが起つた。それが即ち連歌の最も發達した形で、鎌倉時代から始まつたのです。それはもと支那の聯句から出たと申します。併し支那の聯句は全躰で、大きな詩を作るを目的としましたから、出來た結果は一大長篇になりましたが、日本の連歌は悲しい事には、全躰連ねて長いものとする事が出來なかつた。三番目の人がつくるのは二番丈けに合ふやうに作つて一番目の人と關係のないものを書いた。四番目の人は三番目の上の句と合へば宜いので、關係

があつてはいかぬのです。つまり一つの句は兩方の御役に立つこと丁度、長屋の壁のやうなもので、隣と隣の壁になるのです。それ故、百二百千まで連ねた所が出來上つたものは、別々の句である。矢張錦を切れ、に綴つた現象で、短い歌の離れ、のがあるのと、少しもかはりませぬ。これは寔に惜むべきことであります。此の連歌と云ふ者は足利になりまして大變盛になつたのであります。又足利になつて盛になつた事について注意すべきことは、下流社會に移つたことです。即ち平民的文學になつたことです。鎌倉以後歌が定家卿の手に歸して、其他は嘴を入れ、ない、定家卿の規則を守らなければ歌でない、と云ふ風になつたのに、反動して、一方では連歌の發達を促しました。俗語は構はず、材料も俗で構はぬと云ふとになつたのは、つまり和歌の嚴重な束縛を打破つた一つの進歩と思ひます。連歌の最盛な時代は勅撰集の絶えた時代であります。二十一代集は、足利の始の世になくなつた。あとは皆連歌の時代、勅撰集がない時代でありますから、歌を作つても勅撰に還入ると云ふ名譽

もない歌人は争うて連歌に趨りました。連歌の盛んになつた起りはまづ北條時代正和年間坊さんに善阿と云ふ人があつて、其弟子に救済と云ふのがあつた。此二人が連歌を興して、救済の弟子に二條良基があります。二條家は即ち歌の師範家で、和歌の大先生が連歌を學ぶことになつたものですから、連歌が大變な勢力を得てこの人が菴玖波集と云ふ連歌の集を作つて、それが間もなく勅撰集に准せられました。上流社會もいつか其中に卷込まれて仕舞つたのです。この頃の連歌の勢はずさましいもので、自分の領地まで賭けて連歌の巧拙を争ふと云ふ風になつたさうです。併し賭け物をして文學をすると云ふ陋劣な有様ですから、立派な理想の高い文學は出来なかつたのです。良基が菴玖波集をやつてから後宗祇が新菴玖波集を撰んだ。此宗祇と云ふ人は當時の學者でもあり、連歌の達人である。二條良基が菴玖波集を作つたが元歌人であつたから、又歌らしくなつた。これにも八釜敷規則を立て、古い言葉をやらせる風になつた。それではいかぬと云ふので、新菴玖波集を作つて

平民的にやつたのです。其後山崎宗鑑と云ふ人が犬菴玖波集を拵へた。これには滑稽が導入つて來ました。それらの風躰を俳諧躰の連歌と云つたのです。こゝに至つて益々平民的になつて言葉も思想も自由を貴び、なんでも歌に入れられぬものはないことになつた。同じ連歌の中にも度々の變遷があつたのであります。連歌の始めの一句を發句と云ひ、仕舞の句を擧句と云ふ。あげくの果てにはひどい目に會つたなど云ふのはこれから出たのです。この發句を連歌の發句としないで十七字だけで獨立の韻文として行ふと云ふとか始まつた。これがいはゆる俳句です。我國の目に見る歌は長歌が廢つて三十一文字、それが二つに分れて、今度は十七文字の發句となりました。發句は新菴玖波集の時代にはまだ獨立しては行れななつたが、徳川時代には發句丈けで人が價値を求むるやうになつた。發句が即ち俳諧と同じやうになつたのであります。其發達は全く連歌から起因したと云ふことを記憶して置かなければなりません。連歌の舊物は澤山ありますが、秩序が立つて居りませぬから

一々見るは中々煩はしい事です。佐々政一君の著された連俳小史は洵によく出来て居ります。要するに足利時代は全体に學問が衰へた様で、下がけの潮流は中々盛んです。文學が平民的性質を帯びて来て、徳川時代の來るのを用意して居ります。明日は徳川時代を申し上げます。

第八講 近世文學の一

今日は近世文學、即ち徳川時代の文學を御話いたします。徳川時代の文學にはもう少し時間を取る考でありましたが、段々と迫つて來ました。成るべく急ぎませう。第一に足利時代の文學が徳川時代の文學に向つて色々な用意をして置いて呉れたといふことを忘れてはなりません。室町時代の文學は全躰餘り見くびられて居ます。かの謡曲狂言と云ふやうなもの、詰り後世の淨瑠璃を發達させる根源になつたもので、御伽卿子なども小説などには大事な關係があるものです。連歌が發句の本となつたことも前に申上げた通りです。大躰からいへば、徳川時代は學問の盛んな時代、北條足利は學問の衰へた時代ですが、新文學の氣運は足利時代から動いて居るので、足利時代は士流に學問がなく、其末が四分五裂に瓦解しましたから、徳川氏は學問を獎勵して、倫理綱常を以て人心を統一すると、骨を折りました。そこで宋儒の學を獎勵した

のです。併しこれも京都の五山の僧徒などは、とくから研究して居りました。五山の僧徒の中には支那に留學した人もあり、漢文も上手に作り、詩も達者に作った人が往々ありました。社會全躰から見れば、學問の缺乏した時代に、この五山の坊主ばかりは學問の淵藪であつたのです。かういふ風に久しく潜伏して居つた學問が、徳川の時代になつて再び芽を出しはじめたのであります。徳川氏は最初から道徳を以て國を治めようと云ふ考で學者を採用し、學問を普及させたのであります。始めて儒學を徳川氏に講じた人が、かの藤原惺窩先生であります。この人は即ち定家卿の末孫で、冷泉家の人であります。鎌倉の世から定家の子孫が文學を一手に握つて、遂に文學の衰頹を來しましたが、此人の子孫が今度には漢學を以て學問を復興させたのは、不思議の因縁といはねばなりません。惺窩の弟子の林羅山といふ人も博覽な人で、幕府に仕へました。漢學は勿論のと、古い制度、歴史、文學の研究がこの後段々と盛に起りました。林氏は代々學問を以て相續きました。五代將軍の代には、昌平學

校、今のお茶の水の聖堂が建ちました。其聖堂を建てたときは、即ち赤穂義士の夜討のあつた時代、あの時代に忠孝といふ思想の一般に染み渡つて居るとはいふ迄もありません。君父の仇には俱に天を載かすと云ふ思想は社會の輿論でありました。忠孝の道は幕府の學校で教へたのみならず、各藩でも瀕りに學校を立て、忠孝の途を獎勵しました。それ故學問が段々盛になつて、えらい學者も輩出しました。それで徳川時代は此忠孝の教が通じて、學問の根柢になつて居るのです。倫理の大定規になつて、三百年の久しき徳川の將軍を覇主と仰がせて置いたと云ふものは、儒教の力であり、それです。から此時代の文學は儒教の精神を以て終始して居ることは、緒論にも申した通りであります。およそ上下三千年、これ程學問の盛んな時代はありませぬ。第一此時代の文學はあらゆる階級から出て來たと云ふことが、一の貴ぶべき現象であります。是までは文學が大宮人の手から出たり、坊主の手から出たり、或種類